

校定
平家物語百二十句本

高
橋
貞
一
識

平家卷第十二

第百十一句 おほいとのさいご……………一九六

おほいとのおしくはんとうげかう

くはんとうたいるゝ事

しやう人のせつばう

ゑもんのかみさいご

第百十二句 しげひらのさいご……………二〇一

しげひらなんとへわたさるゝ事

あみだくやう

きたのかたさんくはい

おなじくりべつめ事

第百十三句 大ぢしん……………二〇六

九でうのたうたはるゝ事

天もんのはかせうらなふ事

もんどくの御ときのぢしん

しゆしやくの御ときのぢしん

第百十四句 こしごえ……………二〇八

九郎はうぐはんいよのかみになる事

同げんじあまたじゆりやうの事

かちはらざんそ

申じやう

第百十五句 ときたゞのとくだり……………二一一

よりとももんがくちうじやう

よしともばだいへあんこんりうの事

平家いけどりるさいの事

けんれいもんぬん大はらじやくくは

うぬんいんきよ

第百十六句 ほりかは夜うち……………二一六

とさばうしやうらく

とさばうさいご

みかはのかみのりよりよしつねうち

ての事

よしつねをがたのまるゝ事

第百十七句 よしつねみやこおち……………二二一

よしつね御くだしぶみ申うけらる

ゝ事

おなじくよし野のおくにおもむか

るゝ事

おなじくあふしうへくだらるゝ事

三郎せんじやう十郎くらんどうち

ての事

第百十八句 六だい……………二二六

ほうちう六だいいけどる事

もんがく六はらへまいらるゝ事

こひうけ六だい

六だい御ぜん大かくじへまいらるゝ事

第百十九句 おはら御かう……………二三五

ほうわうと女あんと御さんくはいの事

六だうもんだう

りうぐうじやうのゆめ見

ねうぬんしきよ

第百二十句 だんぜつ平家……………二四二

へいじのかたうどちうせらるゝ事

よりともしきよ

もんがくるざい

六だいちうりく

平家卷第十二

(おほいとのさいこ)

げんりやく二年五月七日のうのこく、九郎大夫はうぐはん、おほいとのふしぐしたてまつり、くはんとうへぞくだられける。はうぐはんなさけふかき人にて、みちのほどさまぐにいたはりなくさめたてまつり給ひけり。おほいとの、あはれむねもりおやこがいのちを申なだめさせ給へかしとの給へば、はうぐはん、こんどよしつねがくんこうのしやうには、ひたすら御ふたどころの御いのちを申なだめばやと(こ)そそんじ候へ。よもうしなひたてまつるまでの事は候はじ。いかさまにもおくのかたへなんどぞくだしまいらせ候はんずらんと申されければ、おほいとの、あづまのおく、をんごくのほか、ゑびすがすむなるゑぞがちしまなりとも、との給ひけるぞいとをしき。むかしはなのみきゝしかいだうのしゆくぐ、めいしよく見給ひて、日かずふれば、するがの國うきじまがはらにぞかゝり給ふ。これはうきしまがはらと申ければ、おほいとの、

むかしは以下六行、
覚一本なし。

しほちよりたえぬおもひをするがなるなはうきしまに身をばふじのね

ゑもんのかみ、

われなれやおもひにもゆるふじのねのむなしきそらのけぶりばかりは

さるほどに人々かまくらへいり給ふ。はうぐはん、いかばかりか二ゐどのかつせんのかうをも

たづね給はんずらんとおもひまふてくだられたりけるに、源二ゐ殿たうじいたはりける事ありとて、たいめんもし給はず。はうぐはん、さこそうらめしくおもはれけめ。かぢはらへいざうかけときにおほせて、おほいとのふしをば源二ゐのおはしけるところより、にはを一ツへだてゝ、たいのやにをきたてまつり、ひきのとう四郎よしかずをもつて申されけるは、まつたくりよりも平家にいしゆをおもひたてまつらず、いけのぜんにいかに申され候とも、こ大しやうにう道殿御ゆるし候はずは、よりともいかでかいのちいきて、廿四年のはるあきをばをくり候べき。されどもあくぎやうはうにすぎ、天のせめのがれがたふして、せめたてまつれとのじうめいをかうぶるうへは、しさい申にところなし。かやうに又げんざんつかまつるこそ、まことにほんゐにては候へと申べしとてやられければ、とう四郎よしかずまいりて、此よし申さんとなれば、おほいとのゐなをりて、かしこまつてきかれけるこそくちおしけれ。くにのくの大みやうせうみやうなみゐたり。その中に平家のちうだいさうでんのけ人どもおほかりけるが、これを見て、あの心にてこそさいかいのなみのそこにもしづみ給ふべき人の、いのちいきてこれまでくだり給へ。いまゐなをり、かしこまつてましまさば、いのちいき給ふべきかとてにくみあへり。又あるものが申けるは、まうこしんざんにあるときは、はくじうをそれをそる、かんせいにあるにをよんでは、おをうごかしてしよくをもとむといふほんもんあり。さればいかにたけしやうぐんなれども、かやうになりぬれば、心かはるならひあり。さればおほいとのわるびれ給ふもことほりなりと申てこそ、はぢをばすこしたすけれ。同六月九日九郎はうぐは

これにて一以下四行、
覚一本なし。

はうぐはん以下三行、
覚一本なし。

んおほいとのふしをうけとり、みやこへかへりのぼられけり。おほいとのは、これにてすでにかにもならんずるかとおもふたれば、二たびみやこへたちかへる事のうれしさよとよろこばれける。ゑもんのかみ、わかふおはしけれども心を給ひて、なにかうれしう候べき。都にてきてわたさんずるれうにて候らんとて、かへりのぼる事をうらめしげにぞの給ひける。くにくしゆくくをすぎゆくに、こゝにてもやくとおもはれけれ共、おはりの國のまといふ所にぞつき給ふ。おほいとの、これはこさまのかみよしとものがかうべをはねたるところなり。そのはかのまへにてぞ一ぢやうきられんずらむ、おほいとのもゑもんのかみもおもはれけるところに、はうぐはんおほいとのふしをぐしたてまつりて、ちゝのはかのまへにて三どふしおがみ、くさのかけにても、ばうこんそんりやうかならずこれを見給て、御心をやすめ給へとぞ申されける。され共そこにてもきられず。おほいとの、いまはかひなきいのちばかりはたすからんずるぞとの給へば、ゑもんのかみ、などかたすかり候べき。たうじはあつきころなれば、くびのそんぜんやうをはかりて、みやこちかくなりてきり候はんずらめとて、ひまなくねんぶつをぞ申されける。おほいとのをばすゝめたてまつり給ひけり。日かずふれば六月廿日には、あふみの國のほらのしゆくにぞつき給ふ。あくる日廿一日のあしたより、おほいとのをもゑもんのかみをもひきわけて、ところぐにをきたてまつる。さてこそおやこの人、すでにけふをかぎりにてありけるよと、たがひにおもひあはれけり。しゆつけはゆるされねば、ちからをよばす。はうぐはん三日より人をさきだてゝ、大はらのほんしやうばうたんがうといふひじり

此世は以下三行、
一、本なし、

を、おほいとのゝぜんちしきとす。あふみのしのはらにしやうじくだしたてまつり給ひけり。
すでにきりたてまつらんとするに、おほいとの、ゑもんのかみはいづくにあるやらん、十七年
があひだ、一日へんしもたちはなれず。みづのそこにもしづまずして、うきなをながすもたゞ
かれがゆへなり。しなば一しよにてどこそおもひしに、いきながらわかれぬる事のかなしざよ
となかれければ、ぜんちしきのしやう人、さなおぼしめされ給ひそ。さいごの御ありさまは御
らんぜんにつめても、たがひに御心にかゝるべし。此世はしやうじやひつめつの國なれば、む
まるゝものはかならずしす。あふものはさだまつてはなるゝならひあり。しやくそんいまだせ
んだんのけぶりをまぬかれ給はず。いはんやぼんぶにをひてをや。しやうをうけさせ給ひてよ
りこのかた、たのしみさかへてむかしもいまもたぐひなし。みかどの御げしやくにて、しうじ
やう(の)くらゐにいたり、こんじやうのゑいぐはのこる所なし。いまかゝる御めにあはせ給
ふも、たゞぜんぜの御しゆくぐうなり。世をも人をもうらみおぼしめすべからず。たのしみつ
きてかなしみきたる。天人なを五すいの日にあへりとこそ申候へ。こんねん三十九にならせお
はしませば、三十九年をすぎ給ひけるも、おぼしめしつゞけて御らん候へ。たゞ一夜のゆめの
ごとし。このゝち七八十をすぎさせ給ふとも、おもへばほどや候べき。しんのしくはう、おご
りをきはめしも、つゐにりさんのつかにうづもれ、かんのぶていのいのちをおしみ給ひしも、
むなしくどれうのこけにくちにき。たのしみはかならずかなしみのもとひなれば、しやうは又
しのいんなり。さればほとけは、がしんじくう、ざいふくむしゆ、くはんじんむしん、ほうむ

ぢうほうとどかれたり。ぜんもあくもたゞくうなりとくはんじつるが、まさしくほとけの御心にはあひかなふべしにて候なるぞ。いかなれば、みだによらいは五こうが間しゆいして、おこしがたきぐはんをおこしましぐ、われらをいんじうし給ふに、いかなるわれらなれば、おくくまんこうが間、しやうじにりんゑして、たからの山に入りてをむなしくせむ事は、うらみの中のうらみ、ぐなるうちのくちおしき事に候はずや。ゆめくよねんをおこさせ給ふなどて、かいをさづけたてまつり、しきりにねんぶつをすゝめ申さる。おほい殿たちまちにまうねんをひるがへして、さいはうにむかい、かうじやうにねんぶつをとなへ給ふところに、たちばなのうまのじうきみながといふもの、たちをぬきてうしろへまはるを見給ひて、ねんぶつをとめて、ゑもんのかみもいまはすでにかうかとの給ひもはてざるに、おほいどのゝ御くびはまへにぞおちにける。これを見て、ぜんぢしきのしやう人も、きみながも、なみだせきあへず。いはんや此きみながは、平家のちうだいさうでんのけ人なり。なかにもしん中なごんどもゝりのきやうのもとに、あさゆふしこうのさぶらひなりしが、よにあらんとてどう國へくだり、源氏につきて、一けのしうのくびをきるこそくちおしけれ。そのゝちぜんぢしきのしやう人、ゑもんのかみ殿へまいりて、さきのごとく、かいをさづけたてまつり、ねんぶつすゝめ申さる。ゑもんのかみねんぶつをとなへ給ふが、そもゝおほいどのゝさいこの御ありさまはいかにおはしけるやらんとの給へば、ぜんぢしきのしやう人、よにめでたくこそわたらせ給ひつれとの給へば、なのめならずよろこびて、さらばとくきれとて、くびをのべてぞきらせられける。く

びははうぐはんもたせてみやこへいる。むくろはぜんちしきのひじりのさたにて、みなけうやうしてんげり。同廿三日、けんびいしども、三でうかはらにゆきむかつて、おほいどののふしのくびをうけとり、三でうをにしへ、ひがしのとうねんをきたへわたして、ごくもんにぞかけられける。ほうわうもひがしのとうみんに御くるまをたてゑいらんある。さしも御いとおしみふかゝりしきんしんにておはせしかば、ほうわうもさすがにあはれにおぼしめして、御なみだせきあへさせ給はず。三ゐい上の人の、くびをごくもんにかけるゝ事は、いこくにはそのためしもやあるらん、ほんてうにはいまだせんじやうをきかず。さればあくゑもんのかみのぶよりはきたいのてうてきなりしかば、かうべをはねられたりけれども、つゐにごくもんにはかけられず。いま平家にとつてぞかくはありける。さいこくよりかへりてはいきて六でうをひがしへわたされ、とうごくよりのぼりては、しゝて三でうをにしへわたされ給ふ。いきてのはち、しゝてのはち、いづれかさてをとるべき。

(しげひらさいい)

わたされる一次に第一
本は重衡の北の方の事
がある。

ほん三ゐの中じやうしげひらは、かのゝすけにあづけられて、きよねんよりいづの国におはしけるが、かまくら殿、なんどの大しゆ、此人をばさだめて見たかるらん。此つぎにわたすべし。源三ゐにう道よりまさのまご、いづのくらんどの大夫よりかねにおほせて、なんとへぞわたされける。みやこへはいられず。山しなよりだいごちへぞわたされける。三ゐの中じや

う、しゆごのぶしにむかつての給ひけるは、われ一人のこなければ、此世におもひをく事もなきが、どしごろあひなれたりし女ばうの、ひのといふところにありとさく。うちすぐるやうにて、たちよりてたがひにすがたをいま一ど見もし見えもせばやと思ふはいかに、此事が心にかゝりて、めいどもやすくゆくべしとおぼえずとの給へば、しゆごのぶし、やすき御事にて候とて、ひのにて、太夫の三ゐのしゆくしよをたづねて、大なごんのすけ殿の御わたりや候やらん。ほん三ゐの中將どのゝたゞいまならへ御とをり候が、此つまにてたちながらいま一ど見まいらせんと候といはせければ、きたのかたきゝもあゑ給はず、いとおしやゝとて、はしりいで給ひたれば、あひずりのひたゝれきたるおとこの、やせくらみたるが、ゑんによりゐたるぞそれなりける。きたのかた、いかにやゆめかうつゝか、これへいらせ給へとの給ひもあえず、みすのうちにたふれふしてぞなかけける。三ゐの中將、みすうちかつゐでいり給ひたれ共、たがひになみだにむせて、しばしはの給ひいだす事もなし。やゝありて、三ゐの中將なみだをしのごひて、しげひらこぞ一のたにゝてな^(いかに)にゝもなるべかりし身の、せめてのつみのむくひにや、いけどりにせられて、京かまくらひきしろはれて、はちをさらし、つゐにはならをほろぼしたりし、がらんのかたきなりとて、すでにわたされ候ぞや。いま一ど見たてまつり候はゞやとおもふほかは、こんじやうにとりとゝむる事なし。かやうに見たてまつれば、しでの山をもやすくこえなんとおもふ事こそうれ^{快イ}しけれ。人にすぐれてつみふかふこそあらんずらめども、此世にはごせとぶらふべきものもおぼえず、いかなるありさまにておはすとも、わすれ給ふな

三ゐの中將以下、
で給へば、まで第一本
なし。

よ。しゆつけをまして、かみをかたみにたてまつらばやとおもへども、それもゆるされぬぞとてなき給へば、きたのかた、いくさはつねの事なれば、かならずこそ二月七日をかぎりともしらずして、わかれたてまつりしかば、あちぜんの三ゐのうへのやうに、みづのそこにもとおもひしかども、せんていの御事が心ぐるしかりしうへ、まさしく此世におはせぬともきかざりしかば、いま一ど見たてまつる事もやと、けふまではありつるに、すでにかぎりにておはすらん事のかなしさよ。もしやとおもふたのみもありつるものをとて、なき給へば、三ゐの中將、むかしのすがたをかへずして、たがひに見たてまつりし事こそうれしけれ。なぐさむ事は、夜をかさね、日ををくるともつくすべからず。ならへもとをく候。ぶしどものまつらんも心なし。いとま申さんといで給へば、きたのかた、なく／＼そでにとりつきて、しばらく申べき事ありとて、あはせのこそでにあたらしきじやうへをとりそへて、御すがたのいたくしほれて見えさせ給ふに、これをめせとて、きせたてまつり給へば、三ゐの中將、これをきかへて、もとき給ひたるはかたみに御らんぜよとてをかれけり。きたのかた、それもさる事にて候へ共、はかなきふでのあとこそ、くちぬかたみにては候へとの給へば、御すゞりめしよせて、一しゆのうたをぞかゝれける。

せきあへぬなみだのかゝるからごろものちのかたみにぬぎぞかへぬる
きたのかたのへんかに、

ぬぎかふるころもゝいまはなにかせんけふをかぎりのかたみとおもへば

必ずイ

三ゐの中將、ちぎりあらば、のちのよにてはむまれあひたてまつらん、ひとつはちすにといの
らせ給へど、なみだをさえていで給ふ。きたのかた、はしりもつゐておはしぬべくはおぼしめ
されけれども、それもさすがなれば、みすのうちにたふれふしてぞなかれける。そのこゑには
まできこえければ、三ゐの中じやう、さきへといそぐよしにてはおはしけれども、むまをもす
ゝめ給はず、なかれけるこそあはれなれ。なんとの大しゆ、三ゐの中將をうけとりて、とう大
こうぶくりやうじのおほがきひきまはしせんぎしけるは、そもく此しげひらのきやうは、ぢ
うぼんのあく人たるうへ、三千五けいのうちにももれ、しゆういんかんくわのだうりのきはま
りをなせり。ほりくびにやすべき、のこぎりにてやきるべきとぞ申あへる。らうそう共申ける
は、たゞしがらんをはめつせし（と）き、やがていけどりにもしたらば、もつともさこそすべ
けれ共、はるかにとし月をへ、ぶしのでよりわたしたるを、さやうにせんには、そうどのほう
におんびんならず。たゞしゆごのぶしにかへして、こつがはのへんにてきるべしとて、又ぶしの
てへぞわたしける。八でうのねうゐんに、もくのじうまさときと申は、三ゐの中じやうのもと
めしつかはれしさぶらひなり。これをきゝ、さいごのありさまいま一ど見たてまつらんとて、
むちをあげてはせてゆく。たゞいますでにきりたてまつらむとするとこゝろに、はせつゐて、むま
よりとんでおり、人の中ををしわけくまいりけり。三ゐの中將、これを見て、いかにまさとし
きか。さん候。しげひらたゞいまさいごにてあるぞ。いかにしてもいま一どほとけをはいした
てまつり、きらればやとおもふはいかゞすべきとの給へば、やすき御事にて候とて、しゆごの

ゑんわう以下二行
第一本、詳細。

くはんをんくはんじや
以下、りきしやを
めして、まで第一
本なし。

おしに、しばらく候へひかへ候へいと申のべて、はしりまはり、ほどけをたづねたてまつる。あるふるだうよりほどけを一たいむかひたてまつり、いできたる。さいはひにあみだにてまじりけり。かはらのいさごにすゑたてまつり、まさともいときがかりぎぬのさうのそでのくゝりをときて、ほどけの御てにかけたてまつり、五しきのいとくはんじて、三ゐの中將にひかへさせたてまつる。三ゐの中じやう、ほどけをはいしたてまつり、申されけるは、われふりよにがらんしうめつのよあうにまとはる。たゞしだつたがぎやくしんありしも、天わうによらいのきべつにあづかる。ゑんわうがあくぎやくもすなはちぜんこんの身をえる。ねがはくはあくぐうをひるがへし、あんやうじやうどへいんだうし給へと、ねんぶつかうじやうにとなへて、くびをのべてぞきられける。日ごろのあくぎやうのにくさはさる事なれども、けふの此ありさまを見て、しゅごのぶしも、千まんの大しゆも、みなそでをぞぬらしける。くびをばはんにやじの大そとぼのまへにぐきつけにこそかけられけれ。おしうのかつせんのとき、こゝにうちたつて、がらんをほろぼしたりしゆへなり。きたのかた、大なごんのすけ殿は、あはれや三ゐの中將の、たとひくびはきられたりとも、むくろはすてゝこそをかんずらめ。なにとかしてこれをとりてけうやうせばやとて、くはんをんくはんじや、ぢざうくはんじやといふちうげん、十りきほうしといふりきしやをめして、こしをむかひにつかはしたれば、げにもむなしふすてをきたる。むくろをこしにかきいたてまつり、ひのへかへりまいりたれば、きたのかたはしりいでゝ、むなしきすがたを見給ひて、いかばかりの事かおもはれけん、二めとも見給はず、やがてひきかつお

でぞふされける。くびをば大ぶつのひじり、しゅんじうしやうにん、しゅとにこふてひのへやつかはざるイ。くびもむくろもけふりになし、こつをばかうやへをくられけり。はかをばひのにぞたてられける。ほうかいじといふてらよりそうをしやうじて、さまをかえ、三あの中將のごせをぞとぶらひ給ひける。

大ぢしん以下、卷十二とする。

(大ぢしん)

同七月九日のむまのこくばかり、大ぢおびたゝしふうごひてやゝひさし。おそろしなんどもおろかなり。せきけんのうち、しらかはのほとり、六しうじ九でうのたうをはじめて、あるひはたふれ、あるひはやぶれくづる。ざいぐしよく、神社仏閣イくほうきよみんおく、まつたきはうもなし。あがるちりはけふりのごとく、くづるゝちりはなるかみのごとし。天くらふして日のひかりも見えざりけり。らうせうともにたましみをけし、とりけだものことぐく心をまよはす。ゑんごくもきんごくも又かくのごとし。山くづれてかはをうづみ、うみかたぶひてはまをひたす。おきこぐふねはなみにたゞよひ、くがゆくこまはあしのたてどころをまよはす。大ぢさけて水わきいで、いはわれてたにへころぶ。くうずいみなぎりきたれば、おかにのぼりてもなどかたすかるべき。からざらんイまうくはもえくれば、かはをへだてゝさゝへかたし。つべしイとりにあらざればそらをもかけがたく、りうにあらざればくにもいりがたし。たゞかなしかりけるは大ぢしんなり。四大しゆのなかに、すいくはふうはつねにがいをなせとも、大ぢはことなるへんをなさ

下けんれいもんゐん以下
は寛一本 瀬頂巻に
ある。

ゐるに。ほうわうはいまぐまのへ御かうなつて、御花まいらせ給ひけるが、此大ぢしんいできて、いゑどもふるひたふされ、人おほくうちころされ、じよくゑいできにければ、六でうとのへくはんぎよなる。天もんはかせはせまいりてのゝしる事がぎりなし。ほうわうはなんていにあくやをたてゝぞましゝける。しゆしやうこしにめして、いけのみぎはにしゆつぎよなる。ゆふさりゐねのこくには大ぢかならずうちかへるべしと御うらなひありければ、家内にイあんどするもの上下一人もなし。やりどしやうじをたてゝ、天のなりちのうごくたびには、たゞいまぞしぬるとて、たかくねんぶつ申けるこゑ、しよゝゝにおびたゝし。七八十、八九十のもの共も、世のめつするといふ事はさすがにきのふけふとはおもはざりつるに、ものをイこはいかにせんとて、おめきさけぶ。十三イこれをきゝて、おさなきもの共も、なきかなしむ。もんどく天わうの御とき、せいかう三年三月十五日の大ぢしんは、とう大じの大ぶつのみぐしおちたりけるとぞうけ給る。しゆしやくゐんの天けい二年四月の大ぢしんには、しゆしやう五ぢやうのあくやをたてゝぞましゝけると見えたり。かいびやくよりこのかた、かゝる事あるべしとおぼえず。平家のおんりやうにてよのうせべきかとぞ申ける。けんれいもんゐんは、たまゝたちやどらせ給ふよしだの御ばうも、此大ぢしんにかたぶきやぶれて、いとすませ給ふべきたよりも見えず、なに事もむかしにはかはり給ひたるうき世なれば、なさけをかけたてまつり、これへと申さるゝ人もおはさず。監使みどりのころものしほじみ、きうもんをまぼるだにもなし。心のまゝにあらたるまがきは、しげのゝしげきイほとりよりもつゆけくて、おりしりがほに、いつしかむしのこゑゝうらむらん

もあはれなり。夜もやう／＼ながくなりければ、いと御ねふりもさめがちに、あかしかねさせ給ひけり。つきせぬ御ものおもひに、あきのあはれさへうちそひて、しのぎがたくぞおぼしめす。

(こしこえ)

こしこえ—この章、第一本は卷十一の次、源氏平がの四郎よしのふむさしのかみにぞなされける。そのころ九郎はうぐはんかまくらよりうたるべきとぞきこえける。はうぐはんない／＼の給ひけるは、ゆみやとる身のおやのかたきをうちつるうへは、なに事かこれにすきたるおもひであるべきなれども、せきよりひがしは源二ゐ殿のおはすれば申にをよばず、さいこくはよしつねがま／＼とこそおもひつるに、これこそおもひのほかの事なれ。わづかにいよの國、ぼつくはんれい廿^源よかしよ給つて、さぶらひ十人つけられたりしも、かまくらどのない／＼の給ふ事ありければ、みなかまくらへにげくだり、はたさしのれうにとてつけられたる、あだちのしん三郎ばかりぞ候ひける。源二ゐときやうだいなるうへ、ことにふしのちぎりをして、あさからず、こぞの正月、木そさまのかみついたうせしよりこのかた、どゞのかつせんをして、平家つゐにせめおとし、四かいをすましめ、一天をしづめて、くんこ

同八月九日、九郎はうぐはんいよのかみになる。そのほか源氏五人じゆりやうす。かひ源氏やすだの三郎よしさだとをたふみのかみ、かがみの次郎とをみつしなの／＼かみ、一でうの二郎たゞよりするがのかみ、おほ(う)ちの太郎これよしさがみの守、しなの源氏平がの四郎よしのふむさしのかみにぞなされける。そのころ九郎はうぐはんかまくらよりうたるべきとぞきこえける。はうぐはんない／＼の給ひけるは、ゆみやとる身のおやのかたきをうちつるうへは、なに事かこれにすきたるおもひであるべきなれども、せきよりひがしは源二ゐ殿のおはすれば申にをよばず、さいこくはよしつねがま／＼とこそおもひつるに、これこそおもひのほかの事なれ。わづかにいよの國、ぼつくはんれい廿^源よかしよ給つて、さぶらひ十人つけられたりしも、かまくらどのない／＼の給ふ事ありければ、みなかまくらへにげくだり、はたさしのれうにとてつけられたる、あだちのしん三郎ばかりぞ候ひける。源二ゐときやうだいなるうへ、ことにふしのちぎりをして、あさからず、こぞの正月、木そさまのかみついたうせしよりこのかた、どゞのかつせんをして、平家つゐにせめおとし、四かいをすましめ、一天をしづめて、くんこ

うひるいなきところに、いかなるしさいありて、かまくら源二ゐ、かやうにうらみは思ひ給

ふらんと、かみ一人より、しもばんみにいたるまでふしなす。これはこんねんのはる、わたなべにてふなぞろへのありしとき、はうぐはんとかちはらと、さからたてふたてじのちんを、大きにいかられし事を、^{たりし}かちはらほぬなき事にして、ざんげんして、つゐにうしなひけるとぞきこえし。よをしづめ給ひて、かまくら殿、いまはよりともをおもひかくるもの、^もおくのひでひらぞあらん。そのほかはおぼえずとの給へば、かちはら申けるは、はうぐはんどの、おそろしき人にて御わたらせ給ひ候ものを。うちとけ給ひては、かなふまじきよし申ければ、よりとももおもふなりとぞの給ひける。さればにや、さんぬるなつのころ、平家のいけどり共あひぐして、くはんとうへ下かうせられけるとき、こしごゑにせきをすえて、かまくらへはいれらるまじきにてありしかば、ほうぐはんほぬなき事におもひて、すこしもおろかにおもひたてまつらざるよし、きしやうもんかきてまいらせられ共、もちひられざれば、はうぐはんちからをよばず。その申じやうにいはく、

みなものよしつねをふ^まそれながら申上候。あしゆは、御だいくはんのそのひとつにえらばれ、ちよくせんの御つかひとして、てうてきをかたぶけ、るいだいのゆみやのけいをあらはし、くはひけいのちじよくをきよむ。ちうしやうおこなはるべきところに、おもひのほかにこくうのざんげんによつて、ばくだいのくんこうをもだせられ、よしつねおかす事なくしてとがをかうぶる。こうありてあやまりなしといへども、御かんきをかうぶるのあひだ、むなしくこうらいをながす。つらく事の心をあんずるに、りやうやくくちにがし、きんげん^(か)

みゝにさかふるのせんげんなり。これによつて、ざんしやのじつびをたゞされず、かまくら中にしゆつにうをとゞめらるゝのあひだ、そゐをのぶるにあたはず。いたづらにすじつををくり、此ときにあたつて、こつにくどうはうのぎをぜつす。すでにしゆくうんきはまるところか。はた又せんぜのぐういんか。かなしきかな、此でうぶもそんりやうのさいたんにあらざれば、たれかぐゐのひたんを申ひらかんや。いづれのともがらかあいれんのおもひをたれられんや。ことあたらしき申じやう、じゆつくはいにあひにたりといへども、よしつねしんたいはつぶをぶもにうけ、いくばくじせつをへず、こかうのとの御たかひのち、みなしごとなつて、はゝのくはいちうにいだかれ、やまとの國うだのこほりりうもんのまきにおもむきしよりこのかた、一日へんしもあんどのおもひにちうせす、かひなきいのちばかりながらへるといへども、京とのけいくはひぢしがたきのあひだ、しよこくにるぎやうせしめ、身をざいゝしよゝにかくし、へんどをんごくをすみかとし、どみんはくせいらいにぶくしせられ、しかればかうけいたちまちにじゆんじゆくして、平家の一ぞくついたうせんがために、しやうらくせしめ、てあはせに木そよしなかをちうりくせしよりこのかた、あるときはがゝたるがんせきにしゆんめにむちうち、かたきのために身をほろぼさん事をかへりみず。あるときはまんゝたる大かいにこせうにさほさし、ふうはのなんををそれず、かばねをけいぐのあぎとにかけ、かつちうをまくらとし、ゆみやをぎうとするほんゐ、しかしながらばうこんのいきどをりをやすめたてまつり、ねんらいのしゆくばうをとげんとする事たじなし。あま

つきへよしつね五ぬのじうにぶにんせらるゝのでう、てうけのめんぼく、きたいのちうじよく、なに事かこれにしかんや。しかりといへどもいまかなしみふかふしてなげきせつなり。ぶつしんの御たすけにあらずんば、なんぞしうそをたつせんや。これによつてしよじしよしやのごわうほういんのうらをひるがへし、やしんをさしはさまざるむね、日ぼんごく中の大せうのじんぎやうだうをおどろかしたてまつり、すつうのきしやうもんをかきしんずといへども、なをもつてゆうめんなし。わがてうはしんこくなり。しんはひれいをうけず。たのむところたにあらず、ひとへにきでんくはう大のじひをあふぎたてまつり、びんぎをうかひ、かうぶんにたつせしめ、ひけいをはこぼしめ、あやまりなきむね、はうめんにあづからば、しやくぜんのよけいかもんにをよび、ながくゑいぐはを、しそんにつたへ、ねんらいのしうびをひらき、一ごのあんねいをえ、言ざんそをいはす。しかしながらせいりやくせしむ。しよじけんさつをたれんものをや。せいくはうせいけううやまつてまふす。

げんりやく二年六月日

しん上 大ぜんの大夫殿

とぞかゝれたる。

(ときただのとくだり)

さるほどにかいげんありて、ぶんちとかうす。ぶんち元年八月廿一日、二かまくら源二イみよりと

ものきやう、かたせといふところにいでられけり。もんがくしやう人のむかへとぞきこえし。こさまのかみ殿のくび、ねんらいごくもんにかゝり、ごせとぶらふ人もなかりしを、よしとのめしつかひけるかうかきのおとこ、ときの大りにあひ、さまぐに申うけ、ひやう衛のすけ殿る人にてまし／＼けれ共、すゑたのもしき人なれば、よにいでたづねらるゝ事もこそあらんとて、ひがし山ゑんかくじといふところにふかくおさめてきたりけるを、もんがくきゝいだしくびにかけたてまつり、おなじくかまたひやうゑがかうべをば、でしがくびにかけさせ、こしかきのおともぐしてくだられるとかや。よりともは御いろめされ、ひじりをば大ゆかにきたてまつり、わが身はてい上にたちて、かうべをうけとり給ふぞあはれなる。これを見る大みやう小みやうなみだをながさずといふ事なし。いはあひにだうちやうをたて、御ためとくやうあり。しうちやうじゆゑんとなづけらる。くげよりもあはれにおぼしめすにや、こさまのかみのつかに、ない大じん正二ゑ殿ををくらる。ちよくしはさ大べんかねたゞなり。よりともぶゆうのほまれによつて、ばうぶまでぞうくはんぞうゑにをよびけるこそめでたけれ。

同廿三日、へいじのいけどり、せう／＼みやこにのこりたるを、ゑんるすべしとて、はいしよをさだめらる。平大なごんときたゞのこの國、くらのかみのぶもとさどの國へ、ひやうぶのせうこれあきおきの國へ、さぬきの中將ときざねかづさの國へ、ほつしうじのしゆぎやうのうゑんびごの國へ、二ゑのそうづせんしんあきの國へ、中なごんりつしちうくはいむさしの國へとさだめらる。平大なごんときたゞすでにきん日みやこをいづべしときこえしかば、あづかりの

ぶしに、いとまこひ給ひて、けんれいもんみんのわたらせ給ふよしだの御ばうへまいりて申されけるは、おなじみやこのうちに候はゞ、つねに御ゆくゑをもうけ給はるべく候に、せめおもふして、すではいしよにおもむき候。二たびきうりにかへらん事いまはありがたくこそ候へとて、なみだにむせばれければ、女めん、まことにむかしのなごりとは、そればかりこそおはしつるに、此のちはたれかはとぶらふべきとて、ぎよいのそでをしほり給ふ。此大なごんと申は、こではのぜんじともふゆがまこ、ひやうぶごんの大夫ときのぶがこなり。けんしゅんもんみんの御しうとにて、たかくらのしやうくはうの御げしやくなり。やうきひがさいはいせしとき、やうこくちうがさかへたりしがごとし。八でうの二お殿もあねにておはせしかば、大じやうにう道のこじうとにて、けんぐはんけんじよく心のまゝにおもふがごとし。しそくときいゑ中じやうになり、われ正二ゐの大なごんにいたり給ひぬ。いましばらくも平家のよにてあらましかば、おとゞはうたがひなからまし。ちゝときのおは、くはんともむげにあさかりしかども、せいきよのゝちこそき大じんを給はられけれ。大じやうにう道、天がの大小の事一かう此大なごんにの給ひあはれければ、人平くはんばくとぞ申ける。けんびいしべつたうにも三かどまでなり給ひぬ。此人ちやうむのときは、せつたうがうだうをばとらへて、みぎのひちうで中よりうちおとし、をつばなされければ、あくべつたうとぞ人申ける。さいこくにおはせしとき、三じゆのしんぎことゆへなくみやこへかへしいれたてまつれとおほせくださるあんぜんの御つかひはながたがおもてに、なみがたといふやきじるしさゝれたりしも、此大なごんのしわ

ざなり。ほうわうもやすからずおぼしめされけれども、こけんしゆんもんぬんのゆかり成けれ

に及ばせ給はずイ

ばちからをよばず。九郎はうぐはんしたしくなりしかば、心ばかりはいかにもしてゐるを申

なだめばやとおもはれけれども、かまくら殿ゆるされもなければちからをよばず。かつせんを

し、さきをかけねども、はかりごとをいあくのうちにめぐらしける事、ひとへに此大なごんの

しわざなりければ、ことはりとぞ見えし。としたけよはひかたぶきてのち、さいしにもわかれ

つゝ、見をくる人もなくして、こしちのたびへおもむき給ひけん、心のうちこそかなしけれ。

しがからさきうちすぎ、かたゝうらにもなりしかば、まんゝたるこじやうにひくあみを見給

ひて、大なごんなくゝかうぞの給ひける、

かへりこんことはかたゝにひくあみのめにもたまらぬわがなみだかな

むかしはさいかいのなみのうへにたゞよひて、おんぞうゑくをふねのうちにつもり、いまはほ

つこくのゆきのうちにうづもれて、あいべつりくのかなしみをこきやうのくもにかさねたり。

日かずふれば、のとの國にぞつき給ふ。かのはい所はうらちかき所なりければ、つねはなみぢ

はるかにゑんけんして、なぐさみ給ひけるに、いはのうへにまつありけるが、ねあらはにし

て、なみにあらはれけるを見給ひて、大なごんかうぞの給ひける、

しらなみのうちおどろかすいはのうへにねいらでまついくよへぬらん

かやうにゑいじあかしくらし給ひて、かのはい所にて、大なごんつゐにはかなくなり給ひける

こそあはれなれ。

けんれいもんゐん^{女院イ}に「以下、女院大原入に覺る。本は、灌頂巻に述べる。」

女院イ 初イ

けんれいもんゐんあきのころまではよしだの御ばうにわたらせ給ひけるが、こゝもなをみやこちかくして、たまばこのみちゆき人の、人めもしげし。つゆの御いのち風をまたんほどはうき事のきこえざらん、いかならむ山のおくへもいりなばやとはおぼしめせども、さるべきたよりもなかりけり。ある女ばう、よしだの御ばうへまいりて申けるは、大はらのおく、じやくくはうゐんと申ところこそ、しづかにめでたきところにて候なれと申ければ、女ゐん、これはしかるべきほとけの御すゝめにてぞあらん。山ざとはものゝさびしき事こそあんなれども、よのうきよりはすみよからんなる物をとて、なくくおぼしめしたゝせ給ひけり。れいぜん^{(ん)(い)}の大なごんたかふさのきたのかた、七でうのしゆりの大夫のふたかの女ばうのはかりごとにて、御のりものなんどをもさたしたてまつりけり。ぶんぢぐはん年なが月廿日あまりの事なりければ、よもの木ずゑのいろくゝなるを御らんじて、はるかにわけ入給ひ、山かげなれば、日もはやくくれにけり。のでらのかねのいりあひのこゑさびしく、いつしかそらかきくもりうちしぐれつゝ、あらしはげしく木の^{猥しくイ}はひとしく、しかのねかすかにをとづれて、むしのこゑくたえくたり。じやくくはうゐんは、いはにこけむしてさびたるところなりければ、すまゝほしくぞおぼしめす。すいたいのいろ、もみぢの山、ゑにかくともふでもをよびがたし。にはのはぎはらしもふりて、まかぎのきくのかれくゝにうつろふいろを御らんじて、わが身のうへどやおぼしめしけん。じやくくはうゐんのかたはらに、ほうぢやうなる御あんじつをむすばせ給ひて、一^晝まをぶつしよにしつらい、一まを御しんじよにこしらへて、てうやてうせきの御つとめ、ちやう

じふだんの御ねんぶつおこたらず、天ししやうれい、じやうどうしやうがく、一もんのばうこん、とんしやうばだいといのり給ふ。中にもせんてい、二ゐどの、御おもかけ、いかならんよにかわすれたてまつるべきとおぼし(めし月日)をくらせ給ひけり。せいりやうでんのはなをむすびしあした風きたつてにほひをさそひ、ちやうしうきうに月をゑいぜしゆふべ、くもをほふてひかりをかくす。むかしはぎよくろうきんでんのこのうへに、にしきのふすまをしき、たえなる御すまいなりしかども、いまはしばひきむすぶいほりのうち、よそのたもともしほりける。のきにならぶるうえ木を七でうほうじゆとかたどり、いわまにつもるみづをば八くどくすいとおぼしめす。かくてかみな月十日あまりのころに、にはにちりしきたるならのはを、しかのふみならしすぎければ、女あん、あれ見よや、これほどに人めまれなるところに、いかなる人のきたるやらん。しのぶべきならばしのばんとおほせられければ、大なごんのつぼね、御しやうじをあけて見給へば、人にてはなくして、しかのうつくしげなるが二ツつれて、ならのはをふみならしするにてぞありける。そのとき大なごんのつぼね、

いはねふみたれかとはんならのはのそよぐはしかのわたるなりけり

ねうめんあはれにおぼしめし、なくく御しやうじにかきすぎみ給ひけり。

(ほりかは夜うち)

俊イ
かまくら源二の殿、とぎしやうそんをめして、九郎はさだめてむほんの心もあらんすらむ、せい

どものつかぬさきにうたばやとおもふなり。大みやうせうみやうどもをのぼせば、うぢせたのはしをひき、天が大じにをよびなんす。わそうこぜいにてのぼり、夜うちにも日うちにも、物語ぶつけいするやうにて、九郎をたばかつてうちまいらせよとの給へば、かしこまつてうけ給は

り、やがてその日、五十きばかりにて、みやこへのぼる。げんりやく二年九月廿九日、とさばうみやこへのぼりつきたれ共、はうぐはんのしゆくしよへは、その日もまいらず、つぎの日もまいらず。すでに三日になりけるに、はうぐはんむさしばうべんけいをもつて、いかにのぼられて候ときくに、かうともうけ給はらざるやらん。又源二の殿よりおほせらるゝむねは候はぬかたとたづねられければ、しやうそんきゝもあへず、べんけいにたいめんして、つれてはうぐはんのしゆくしよへぞまいられける。はうぐはんいであひげんざんし給ひて、いかに一さく日よりのぼられ候とうけ給るに、いまゝではかうとも申され候はぬやらん、又かまくら殿より御ふみなどは候はぬとたづねられければ、しやうそん、さん候。かまくら殿よりは、さしたる事も候はねば御じやうはまいらせられ候はず。御ことばに申せとおほせの候ひしは、たうじ京とになに事も候はぬは、さてわたらせ給ふゆへかとこそおぼしめされ候へ、とおほせの候しが、これは、よの中もおだやかになりて候あひだ、七大しよまふ詔でつかまつらんとて、いとま申てまかりのぼり候が、みちよりいたはる事候ひて、とかくしてのぼりつゐては候へども、いまだくはいきならず候あひだ、やがてもまいらず候と申ければ、いよのかみ、さはよもあらじ。かちらはがざんげんにつゐて、かまくら殿、つねはよしつねをうたんと給ふなるときく。大ぜいのぼせ

ば、うちせたのはしをもひき、天下の大事にをよびなん。わそうこぜいにてのぼり、夜うちにもうちてまいらせよとのぼせられたるにこそとの給へば、とさばうがんしよくかはつて、まつたくさる事候はず。さ候はゞきしやうをかひてげんさんに入べしと申。かゝふともかゝじとも御ばうが心よとの給へば、やがて三まいのきしやうもんをかひて、一まいをばやめてのみなんどしてかへりければ、むさしばう申けるは、此はうしはきしやうはかきて候へども、なにとやらんあやしふおぼえ候。をつつきてしやつがかうべをはね候はゞやと申せば、いよのかみ、おもふになにほどの事があるべき。たゞかへせとてかへされけり。いよの守、そのころいよのせんじといふしらびやうしがむすめに、しづかと申をんなをあひしてをかれたりけるが、たゞいまのほうしは、きしやうはかきて候へ共、しさいありとおぼえ候。人をつけて見せさせたまはでと申せば、わらは一人見せにつかはす。とさばうもおそろしきものにて、はうぐはんさだめて人をつけて見せ給ふらんとおぼえて、これももんに人をたてゝ見るほどに、けしかるわらはの一人たゝずみける所をとらへてとふにおちねばやがてうちころす。すでにくらふなるまで見えざりければ、又しづかをんな（一人）見せにつかはす。をんなほどなくはしりかへり、とさばうたゞいまぶつけいとてうちいで候。此つかひはきられて見え候と申もはてねば、そのせい五十きばかりにて、いよのかみの六でうほりかはのしゆくしよへをしよせて、ときをどつとつくる。いよの守おりふしきうちして、物の具すべきやうもなくてましゝけるが、ときのことにおどろひて、かつばとおきて、よろひとつてき、やかきをひ、ゆみとり、御むままいらせ

すゞきの三郎以下、
寛永本は田原三郎
井太朗は武蔵房弁慶の
三人のみ

よとの給へば、むまにくらをき、ゑんのきはにひつたてたり。うちのりて、天おくしんだんは
しらず、よしつねをてごめにしつべきものはおぼえぬ物哉となりのりさけんでかけ給へば、つゞ
くものには、すゞきの三郎しげいゑ、かめ井の六郎しげつね、さとう四郎びやうへたゞのぶ、
いせの三郎よしもり、源八びやうゑひろつな、くまゐ太郎、えだのげんさういげのつはもの廿
よき、おめひてかく。しやうそんがせい五十き、さんぐにけやぶられて、のこりすくなくう
たれけり。いよの守のかたには、源八びやうゑひざのふしいられ、くまゐ太郎うちかぶといら
れてひきしりぞく。ころは十月廿日の夜なりければ、くらさはくらし、あめはふる。しやうそ
んがたのむところのつはもの、さんぐにうちちらされ、しやうそんむまをいさせ、かちだち
になつて、よろひぬぎすておちけるが、いかにもしてこんやほつこくのかたへとおもひけれ
共、かなはずして、その夜くらまのおくそうじやうがだに、ぞにげこもる。いよのかみのつは
ものども、あとをつなぬでをつかくる。くらまでらのそうどもはこれをきき、はうぐはんはい
にしへのよしみにことならずふかゝりければ、もろともにたづねゆく。らうそうのよろひひ
たたれきたるほうし一人、そうじやうがだによりからめとり、おめ／＼とかめ井の六郎にぐせ
られて、つぎの日のひつじのこくばかりに、いよのかみの六でうほりかはのしゆくしよにぞい
できたる。つぼのうちにひきすゑたり。いよのかみゑんより、いかに御ばう、きしやうにはお
ちたるぞとの給へば、しやうそん大きにうちわらつて、さん候。あり事にかひて候ほどにおち
て候よとぞ申ける。いのちおしくばたすけんぞ。かまくらにくだりて、源二位殿をもいま一ど

なかつかさ以下、
もくこの事、第一本な
し。

見たてまつれとの給へば、しやうそん、まさなや、とのほどの大しやうぐんをうちたてまつら
んとおもひかゝつてのぼらんずるものが、とのをうちたてまつらずして、いのちいきて二たび
かまくらへくだるべしとはおぼえず。御おんにはいそぎくびをめせとぞ申ける。心ざしのほど
しんめうなりとて、なかつかさのじうともくにといふ京さぶらひにおほせて、ほつしやうじの
やなぎはらにてきられけり。ざつしきあだちの三郎きよつねをかまくら殿はたざしのれうにと
てつけられたりけるが、ないくははうぐはんいかなるあらぬふるまひのときは、夜を日につ
みではせくだりて申べしと御やくそくありて、つけられたりければ、しやうそんがなりゆくあ
りさまを見て、ひそかにみやこをにげいで、かまくらへまいり、此よしいちに申せば、源
二ゐ殿大きにさをがれけり。しやていみかはのかみをよびて、御へん九郎がうちての大しやう
にのぼり給へとありければ、みかはのかみじゝ申給ひけり。かまくら殿いかつて、さては御へ
んも九郎とどうしんござんあれ。ないけふよりしてよりともきやうだいのぎあるべからず、かまく
ら中にもおはすべからずとの給へば、みかはのかみ大きにおどろき給ひて、いそぎのぼるべき
よし申されけれども、ゆるされず。まつたくおろかにおもひたてまつらずと百まいのきしやう
をかひてさゝげ給ひしか共、なをももちひられず、つみにいづのほうぢうへをつくだし、そこ
にてうしなはれけるとぞきこえし。しうとほうぢうの四郎ときまさを大しやうぐんにて、六ま
んよきをさしのぼせらる。はうぐはんはちんぜいのかたへおちばやとおもひたち給ふ。こゝに
をがたの三郎これよしはみせいものなりけるあひだ、よしつねにたのまれよとの給ふ。これ

よし申けるは、さ候はゞみうちなるきくちの二郎たかなをはねんらいのかたきにて候。給はつてかうべをはねんと申。申までなくやがて給はりてければ、六でうかはらにてきられにけり。これよしかひくしくたのまれけるとかや。

(よしつねみやこおち)

同十一月一日、いよのかみぬんの御しよへまいり、大くらきやうやすつねのあそんをもつて申されけるは、よしつねこそ、かまくらよりうたれべきにて候へ。うちせたのはしをもひきて、しばしさへべく候へども、きみの御ため心ぐるしく候へば、さいこくのかたへおちゆかんとぞんち候。とゞてうてきをたひらげ候ひしちうこう、いかでか御わすれ候べき。ちんぜいのもの共に心を一ツにして、がうりよくすべきよし、ぬんちやうの御くだしぶみを給はり候はゞやと申ければ、ほうわうおぼしめしわづらはせ給ひて、大じんくぎやうに此よしをおほせらる。仰合せイ人々申されけるは、らく中にてかつせんつかまつらば、てうかの御大事たるべし。ぎやくしん京中をいだしなば、おだやしき事おだしきイにこそ候はんずれと、しよきやう一どうに申されければ、ほうわうさらばとて、やがてちやうの御くだしぶみをなされけり。同三日うのこくに、いよのかみ、おち三郎せんじやうよしあき、憲十郎くらんどゆきいゑ、ちんぜいのぢう人、をがたの三郎これよしあひぐして、そのせい三百よき、みやこにひとつのわづらひをなさず、さいこくへこそおちゆきけれ。つの國の源氏大たの太郎よりもと、てしまのくはんじやよりすゑ、これを

きゝ、九郎はうぐはんさいこくへおちゆきけるを、や一ツをもうずんば、かまぐらのきこえあしかりなんとて、三百よきにてをつかけたり。いよの守の給ひけるは、きたなし。とのぼらかへしあはせて一かつせんせよとありければ、つはものどもとつてかへし、おめひてかく。大たの太郎、てしまのくはんじやは人めばかりにや一ツいかけてひきのかんとしけるところに、ていたふかけられてひきのく。いよのかみ、事のであはせ、かどでよげなり。うてやゝとて、その日津の國大もつのうらにぞつき給ふ。それよりふねにのりをしいだす。平家のおんりやうやこはかりけん、にはかににし風はげしくふきて、たのみつる三郎せんじやう、十郎くらんど、をがたの三郎がのつたるふねどもは、いづくのうらにかふきよせけん、ゆきかたしらずぞなりにける。はうぐはんのふねも、とうごくすみよしのうらにふきよせらる。みやこよりめしぐせられたる女ばうども、十よ人、すみよしのはまにすてをきて、しづかばかりめしぐして、そのせい廿よ人、やまとの國よしのゝおくへぞおちられける。すてをかれたる女ばう共、あるひはまつとした、あるひはいさこのうへに、はかまふみしだき、そでをかたしきふしける。人これをあはれみ、京へをくりけり。よしのほふし此事をきひて、九郎はうぐはんの此山にこもりたんなる。いざやうちとり、かまぐら殿のげんさんにいらんとて、ゆみやひやうぢやうをたにし、す百人せめきたるときこえしかば、いよのかみ、よしの山にもあととめず、ふせぎやいさせ、よし野山をもおち、そのとしはみやこほとりにしのび給ひけるに、ぶんぢ二年のはるのころ、ひでひらをたのみて、あふしうへおちゆかれけり。同十一月七日、ほうぢうの四郎とき

まさ、六まんよきにてみやこへいる。やがてその日みんざんして、よしつねゆきいゑよしあき
らがむほんのよしそうもんす。たちまちうりくすべきのむね、みんぜんをくださる。さんぬ
る一日は、よしつね申によつて、ちんぜいのしやうぐんたるべき御くだしふみをなされ、同七
日には、よりとも申さるゝによつて、よしつねついばつすべきむね、みんぜんをくださる。あ
したにかはりゆふべにへんずる世の中變るイのふぢやうこそくちおしけれ。又しよ（こ）くにしゆご
ををき、しやうゑんにちとうをなし、たんべつひやうらうまいあておこなふべきよしそうもん
す。ほうわうおほしめしわづらはせ給ひて、大じやう大じんいげのくぎやうに此よしをおほせ
あはせらる。人々申されけるは、ていわうのおんできをほろぼしつるものはんごくをたまふ
といふ事、むりやうぎきやうに見えたり。されどもいまだわがてうにそのれいなし。源二の殿
申じやうくはぶんなりとときみもおほせられけれども、源二の殿かさねて申されければ、ぶんち
元年十一月廿日、よりどものきやう日ぼんごくの大しやうけんちとうにふせらる。いまだせん
れいなきおんしやうなり。よしだの大な言つねふさのきやうをもつて、かやうの事申されけ
り。此大なごんはなに事につけても、すぐき人直きイときこえ給へり。平家にむすぶふれたつし人々
も、源氏のつよりしのちは、きやくりきをくだし、文をつかはし、さまゝくはんとうをへつ
らひ給ひしかども、此大なごんは一どの事もわるびれ給はず。此大なごんと申は、ごんのう申
べんみつふさのこなり。十二にてちゝにをくれ給ひておはせし（共カ）かば、しだいのしうしんとこ
ほらず、せきらうくはんじゆをへて、さんぎ大べん、中なごん、だぎいのそつ、つめに正二の

大なごんにいたり給ふ。よの中のぜんあくはきりふくろをだつするがごとし。

十郎くらんど以下、
第一本は六代の後に述
べる。

十郎くらんどは天わうじにありときこえしかば、ほうぢううちてをくだす。しなの、國のぢう人、いゑはらの九郎、ひたちの國のぢう人、いしまの（五郎）二人、百きばかりにて天わうじにくだる。くぼのうたのかみかねはるがもとにありときこえしかば、そこをよせてさがすになし。かねはるむすめ二人あり。ともにゆきいゑのおもひものなり。いかでかするべきなれ共、ことイぐして京へぞのぼりける。十郎くらんどは、らうどう一人ぐして、かちだちにて天わうじをたちいで、くまのゝかたへとおちゆくほどに、ひとりしもべがいたはる事ありて、ゆきもやらざりければ、いづみの國やぎのがうといふところにどうれうす。留ていしゆのおとこは見しりて、いそぎみやこへのぼりて申ければ、ほうぢうやがてうちてをくださる。山そうににしのきただにのほうし、ひたちばうしやうめいといふあくそうをよびて、あつぱれ御へん十郎くらん（ど）殿のいづみの國におはすなる、うちたてまつりて、かまくら殿のげんさんにいり給へかしといひければ、ひたちばう、さ候はゞせひを給はつてくだり候はんと申。しのびておはすなれば大ぜいにてはかなふまじ。こぜいにてくだるべし。とてイざつしき大げんじむねやすといふおほおとこをはじめとして、しもべ十四五人ぞつけられる。天わうじへくだるては、つの國をへて京へいる。ひたちばうはかはちゞをへてはせくだる。いづみの國やぎのがうにくだりつき、くだんのいゑをさがすになし。いたじきはなち、天じやうさがせ共なかりけり。しやうめいもんにたちけるに、百しやうのつまかとおほしきをんなのとをりけるにとへどもしらずと申。し

らぬ事はあるまじと、あらけなくとひければ、よにじんじやうなる人のたゞ二人あれなるいゑ
にとをしゑける。十郎くらんどは、こそでに大ぐちばかりにて、こんのひたゝれきたるおと
こ、さけあはせんあいイとするところに、しやうめいくろかはおどしのはらまきに、四しやく二寸の
たちをぬきとんでゐる。おとこにげゆくを、ひたちばうをつかくる。これはゆきいゑのらうど
う也。十郎くらんどこれを見て、ゆきいゑはわれなるぞ。かへせとの給へば、ひたちばうとつ
てかへす。くらんどくさずりのはづれをきられければ、かなはじとやおもひけん、たちをすて
てむずとくむ。たがひに大ぢから、しうぶなかりしに、大げんじむねやす、つぶせてイにてちやう
どうつ。下(らう)なればとてさるためしやあるとの給へば、あしになはをかくるとて、あま
りにあはてゝ二人が四つのあしをぞゆふたりける。かゝりければ、しもべもいできたり、さ
まゝにしてからめてけり。十郎くらんど、御ばうはよりともがつかひか、ほうちうかつかひ
かどとはれけるこそしんめうなれ。いそぎぐしてのぼるほどに、わたなべにてほうちうのしそ
く、ときふさのおぼつかなさにくだられけるにゆきあふたり。しやうめいあんどして、その夜
は江ぐちのちやうじやがもとにぞとゞまりける。つぎの日ほうちうあか井がはらにゆきむかつ
てかうべをはねてけり。あにのしだの三郎せんじやうよしあきは、いがの國せん川渡イと、いふ山で
らにおはしけるが、たうごくのぢう人、はつとりへい六ときさだといふものにとりこめられ、
じがいしてんげり。はつとりやがてくびをとり、かまくらへくだる。此はつとりと申は、平家
しこうのものなりしが、ほんりやういのはつとりをぞかへしたびにける。ひたちばうは十郎

くらんどのくびもち、かまくらへくだる。しんめうなりとはの給へ共、大しやうぐんうちつるそのをそれとて、むさしの国かさ井へながされけり。されどもとがなければ、つぎのとししやめんありて、たちまの國大たのしやう、つの國はむろのしやう、此二かしよをしやうめいにぞ給りけれ。

(六だい)

みやこのしゆごにのぼられけるほうちうがもとへ、源二ゐ殿いひのぼせられけるは、平家のしそんなだめておほかるらん、たつねいだしてうしなひ給へとの給ひければ、平家のしそなたづねいだしたらん人は、なに事ものぞみのまゝたるべしとひろうしければ、京のものあんないしりたり、たづねもとめけるこそうたてけれ。下らうのこなれども、いろしうく見めよきは、かの中じやうのわかぎみ、此せうしやうのきんだちなんどゝ申。ちゝはゝかなしめば、あれはかいしやくが申事なりとて、うばひとり、おきなきをば水にいれ、つちにうづみ、おとなしきをばくびをきる。その中にこまつの三ゐの中じやうこれもりのしそく、六だい御ぜんとて、としもおとなしくおはするうへしけるうへイ、平家ちやくゝの正とうなり。これをうしなはれよとかまくらよりの給ひのぼせられければ、ほうちうたづねかねて、すでにくだらんとするところに、ある女ばう、六はらへきたりて申けるは、これよりにし、へんしうじのおく、をぐら山のふもと、大かくじと申所に、こまつの三ゐの中じやうどのゝきたのかた、わかぎみひめ君あひぐして、此

三とせすみ給ふぞとをしゑけるほどに、ほうちうやがて人をつかはして見せられければ、つかひこのばう中にいり、人をたづねぬるよしにて、まがきのひまより見いたれば、おりふしろきゑのこのはしりいでたるをとらんと、いつくしげなるわかぎみのはしりいで給ひたるを、めのとかとおぼしき女ばうのあはてゝつゝゐていで、あなあさましや、人もこそ見候らめとて、いそぎひきいたてまつる。一ちやう此人なるべしと心ゑて、つかひかへりて申せば、ほうちう五百きばかり大かくじへをしよせうちかこめ、^{むイ}これにこまつの三ゐの中じやうどのゝわか君のましますなる、ほうちうと申もの御むかへにまいりて候と人をいれていはせければ、はゝ御せん、たゞわれをさきにうしなへとてぞなかれける。此三とせはたかくだにもわらはざりし人々の、こゑをあげてぞさけび給ひける。ほうちうげにもさこそおぼしめし給ふらめとて、しゐてばうにもせめいり給はす、^{入らずイ}いだしたてまつらるゝをまつほどに、日もやうゝくれゆけば、かさねてつかひをいれて、べちの御事候まじ。いだしまいらさせ給へといはせければ、さいう五さいとう六、きたのかたの御まへにまいり、かたき四はうをかこみ候。いづくよりもれ候べきやと申せば、六だい御ぜん、つゐにのがれ候まじ。ぶしどもうちいりさがしなば、をのゝもうかるべし。とくださせ給へ。いのちいきて六はらに候はゞ、又まいらんとの給へば、かみかきなでゆひなんどして、御しやうぞくさせたてまつり、はゝ御ぜんくろきのじゆずのちゐさきをとりにだし、や御ぜんこれをもつてねんぶつ申、ちゝ御ぜんとひとつところにむまれよとの給へば、御ぜんにはわかれまいらするとも、ちゝ御ぜんにはかならずどうしよにこ

そと、おとなしやかにぞの給ひける。こんねんは十二さい、見めかたちいつくしくたをやかに、なみだのすゝみけるを、よはげを見せじとや、をさゆるそでのひまよりも、あまりてなみだぞこぼれける。さてもあるべきならねば、こしにのせてぞいだし給ふ。さいとう五さいとう六御ともしけり。ほうちうのりかへにのせんとしけれ共、さいこの御ともくるしからずとて、六はらまではだしにてこそまいりけれ。はゝやめのとほむなしきあとにとゞまりて、いかにせんとぞもだえ給ふ。又こそとなくさめつることばのおとなしさを、いつわすれつともおぼえず、としごはせのくはんをんをたのみたてまつりしに、ぢやうぐうはほとけもかなはせ給はぬにや、さればゆふさりやきられん、あかつきやきられんずらむなんど、よもすがらね給はねば、ゆめさへも見ざりけり。かぎりあれば、けいじんあかつきをとなへ、ながき夜もはやあけぬ。六はらよりさいとう五、わかぎみの御ふみもちてまいたり。きたのかた、まづいかにやととひ給へば、べちの御事候はずと申。此文を見給へば、べちの御事候はず。御心ぐるしくなおほしめされそ。いつしかみなくこひしくこそと、おとなしくかゝれたりければ、むざんのものゝ心やと、ふみをかほにをしあてゝぞなき給ふ。さいとう五さんじもおぼつかなく候に、いとま申てかへらんとしければ、御返事給りけり。六はらへたちかへる。めのとの女ばうは、そこともなくあこがれゆく。ある人いたはりけるやうは、たかをさんのもんがくといふ人こそ、たうじかまくら殿のたいせつにおぼしめす人なれ。されば上らうのきんだちをもでしにとほしがり給ふなるといひければ、あしにまかせてまよひゆく。たかをさんへたづねいり、

おぎきばうにゆき、こまつの三の中將殿のわかぎみ、こんねんは十二さいになり給ふ。よに
いつくしくましませしを、きのふぶしにとられてさぶらふぞ。あまりにいとをしく候へば、こ
ひとり御でしにし給へかしと申ければ、もんがく、さて一ちやう此山にをき給はんか、さん候イ
ちだにたすかり給はゞ、ひじりの御ぼうの御まゝとぞ申ける。ぶしはたれなるらん。ほうちう
と申せば、さてはしらぬ人かとこそおもふたれ。ゆきてたづねんとていつる。一ちやうとはお
ぼえね共、大かくじへかへり、此よし申せば、はゝ御ぜんまづよろこび給ひけり。もんがく六
はらへゆきて、此よしたづねられければ、ほうちう、さ候はゞこそ。平家は一もんひろかりし
かば、しそんおほからん、たづねとつてうしなへとかまくらよりうけ給り候。その中にちやく
ゝの正とう、六だい御ぜんとてあり。かならずたづねいだしうしなひたてまつれと候ひしか
ば、きゝいだしむかへたてまつり候へども、あまりいたはしさに、いまだともかくもせずとぞ
かたられる。おさなき人はいづくに候ぞやととはれければ、御らんぜよとて、わか君のおは
すまへにぞいれられける。かみすがたよりはじめて、はかまのきゝはにいたるまで、すべてい
つく（し）かりけり。くろ木のじゆずのちみさきをつまぐり給ふがイ。ひじり見給ひて、なにとか
おもはれけん、なみだくみ給へば、なかゝめもあてられず。たちかへるすゑのよ、いかなる
どくとなるとも、いかでかたすけざるべき。ぜんぜのなにのちぎりぞや、あまりにいとをしく
おぼゆるものかな。もんがくかまくら殿にちうをつくせし事は、御へんかねて見給ひしかば、
いまさら申にをよばねども、いつのほうちうにながされておはせしとき、ちよくかんを申なだ

めんとて、ちさとのみちをとをしとせず、らうれうのしたくにもをよばず、ふじがは大井がはにをしながされ、うつの山たかし山にて、さんぞくにいしやうをはぎとられ、いのちばかりいきて、ふくはらの御しよへまいり、あんせん申しだしたてまつりしやくそくには、いかなる大じをも申せとの給ひしぞかし。されどもちぎりをおもくして、いのちをかるんず。さればかまくら殿にじゆりやうしんたくし給はずは、よもわすれ給はじ。廿日のいのちをたすけ給へとていでられけり。さいとう五さいとう六、ひじりをたゞしやうじんのほとけのやうにおもひて、三どふしおがみ、よろこびのなみだをながし、大かくじへまいり、此よしかうと申せば、なげきしづみておはせしが、いそぎおきあがり、此みとせはせのくはんおんにいのりのりはこゝぞかし。かまくらの御ゆるしはしらねども、ざんじのいのちをのべんにこそとて、あかしくらし給ふほどに、廿日をすぐるはゆめなれや、ひじりはいまだ見えざりけり。さるほどに十二月十五日にもなりにけり。ほうぢうさのみ都にてとし月ををくるべきやうなし。みやう日くだらんとぞひしめきける。さいとう五さいとう六、大かくじへまいり、ほうぢうはすでにみやう日たち候。なにとてひじりはいまだ見えさせ給はぬやらんと申せば、きたのかた、さればとよ、よくばさきに人をものぼせてん、たゞあしふしてぞをそか(る)らん。さてうしなはんずるありさまかとの給へば、さん候。いかさまにもあかつきほどにてや候はん。そのゆへは、ちかくめしつかひ候し、いゑのこらうどう共、わかぎみを見まいらせて、よにも御なごりおしげにて、みやう日こそすでにまかりくだり候へとて、ねんぶつ申も候。そばにむあてなみだぐむも

のも候と申せば、さて六だいはいかにあるぞとの給へば、人の見まいらせ候ときは、御ねんじ
ゆつまぐらせ給ひて、さらぬやうにもてなし、なさせましますイさなきときは、御なみだにむせばせ給ふと申。

それはさぞあるらん。心なきものだにも、いのちはおしむぞかし。さてをのれらはいかにせん
との給へば、いづくまでも御ともつかまつり、(いか)なに、もならせ給ひて候はゞ、けぶりとなしま

いらせ、御こつをとり、かうやにおさめたてまつり、きやうだい共にほうしになり、ごせとぶ
らひまいらせんとこそ申あはせて候へとて、なくくいとま申て、六はらへたちかへる。おな

じき十六日のうのこくに、ほうちうすでにくはんとうへくだる。わかぎみこしにのせたてまつ

り、六はらをぞうちいでける。うゐむじやうのさかひ、けふ此人こへ給ひなんずとて、見る人
そでをぞぬらされける。こまをはやむるぶしあれば、われをころすかとむねさはぐ。そばにさ

ゝやくものあれば、いまをかぎりときもをけす。まつさか四のみやがはらかとおもへば、せき
でらをもうちこえて、山イ大津のうらにもなりにけり。あはづかのちかとおもへども、その日もき

らでぞやみにける。さいとう五さいとう六ものをだにもはかずして、あしにまかせてゆく。下り行くイほう
ちうこまのあしをはやめけるほどに、するがの國千ぼんまつばらにもかゝり給ふ。こゝにて

こしかきすへ、しきがはしき、わかぎみをおろしたてまつる。ほうちう、さいとう五さいとう

六をそばによびて、いまはどうくかへり給へ。けふよりのちはなにをとおぼつかなくおもひ
給ふべきとの給へば、さいとう五さいとう六これをきゝ、さてはこゝにてうしなひまつるよと

おもふに、ものもいはず。ほうちう、六だい御せんに申けるは、なにをかくしまいらせ候べ

き。ひじりにやあひ候と、これまではぐしまいらせつるなり。一ごうしよかんの人にてわたらせ給へば、たれ申ともよもかまくら殿御もちひ候はじ。あしがらよりあなたまでもぐしまいらせんとぞんし候へども、かまくらどのゝきこしめされんところもをそれにて候へば、あふみの國にてうしなひまいらせたるよしをこそひろうつかまつり候はめと申せば、六だい御ぜん、さいとう五さいとう六をめしよせて、なんぢらわがはてを見つる物ならば、あな大かくじにて申なよ。はゝ御ぜんなげき給はゞ、めいどのさはりともなるべし。くはんとうにをくりつけて候が、たうじ人にあづけられてありと申べしとの給へば、さいとう五さいとう六、君にをくれまいらせて、あんおんにみやこまでのぼりつくべし共おぼえず候とて、なくくにしにむけまいらせ、十ねんすゝめたてまつる。たちどりほうぢうにめをあはせ、いづくにたちをうちあてまいらせんともおぼえず候。じよの人にとじたい申せば、さらばあれきれ、これきれとて、きりてをもとむるところに、ふみぶくろくびにかけたるそうの、あしげのむまにのりてはせきたる。これはたかをのひじりのでしなりしが、あのまつばらにて、たゞいまめしうとのきられ給ふと人申せば、あまりの心もとなさに、かさをあげてぞまねきける。ほうぢうこれを見て、しさいあり、しばしとてまたれける。まつばらちかくなりければ、此そつむまよりとんでおり、わかぎみゆるされさせ給ひて候。かまくら殿のみけうしよこれに候とて、ほうぢうにたてまつる。ひらいてこれを見れば、こまつの中じやうこれもりのしそくたづねいだして候なるを、たかをのひじりのしきりに申さるゝのでう、あづけ申べし。ほうぢうの四郎どのへ、より

ともとぞかゝれたる。御じひつなり。御ざいはんなり。しんめうなりくどてまき給へば、さいとう五さいとう六、なか／＼あきれてものいはず。ほうちう、いゑのこらうどうども、みなよろこびのなみだをぞながしける。さてもんがくきたられたり。六だい御ぜんこひうけたりとて、きしよくまことにゆゑしげなり。ちゝ三ゐの中將殿はすどのいくさの大しやうなれば、いかに申ともかなふまじきと、かまくら殿の給ひしを、ひじりがほうこうのよしみをさまぐ／＼申しらゆるほどに、をそかりつるよとの給ひける。ほうちう、さ候へばこそ廿日との給ふ日かずもすでにのび候に、おもへばかしこふこそいままでのがしまいらせて候へとて、ともによろこびのいろをなし、御こしにのせたまつり、さいとう五さいとう六をばのりかえにのせてのぼす。此ほどなに事につけてもなさけふかゝりし事いまさらうれしきにつけてもつきせぬものはなみだなり。わかぎみものこそたまはね共、よにもなごりおしげにおもはれたり。一日ちなんどもをくりまいらせ^{すイ}べう候へども、かまくらにまいりて申べき大じあまた候へばとてひきわかる。ひじりはわかきみうけとり、夜を日にしてのぼるほどに、おはりの國あつたのへんにしてとしもくれぬ。正月五日の夜にいりて、みやこへのぼりつき、二でうゐのくまのいはがみと申所に、もんがくのさとぼうあり。そこにいれたてまつり、いきをぞつかせける。夜中に大かくじへおはして見給へば、もんをたてゝ人なかりければ、をともせず。つゐちのくづれよりわかきみのかひ給ひたるゑのこがはしりいでゝ、ををふりてむかひけるに、はゝうへはいづくにましますぞととひ給ひけるこそせめての事なれ。さいとう五つゐちをこえて、かどをあ

け、いれたてまつるに、ちかふ人のすみたとところとも見えざりけり。さればなにとなり給ひたる事どもぞや。いかにしてかひなきいのちをいきたるぞやとたふれふし、なかれけり。いのちをつがんとおもふも、此人々にいま一ど見もし見えもしたてまつらんとおもふがためなりとて、夜もすがらなげきかなしみ給ふぞまことにことほりとおぼえてあはれなる。あけてのち、きんりの人にとひ給へば、としのうちは大ぶつまふでときこえさせ給ひしが、正月のほどはちやうらくじに御こもりとこそうけ給り候へと申ければ、さいとう五いそぎかしこにたづねくだりて、はゝ上にあひまいらせて、此よし申ければ、はゝうへ、こはさればゆめかやゝとよろこばれけり。いそぎ大かくじにかへり、わかぎみを見まいらせさせ給ひて、うれしさにもさきだつものはなみだなり。はやゝしゆつけし給へとの給へ共、ひじりおしみたてまつりてしゆつけをばせさせたてまつらず、たかをにむかへたてまつりて、をきまいらせらる。はゝうへのかすかなる御すまぬをも見つぎ給ひけるとぞきこえし。そのゝちかまくらどの、もんがくのもとへ、びんぎのときは、いかにこれもりのこは、むかしよりとをさうし給ひしやうに、てうてきをもほろぼし、くはいけいのはちをきよむべきものにて候やらんとの給へば、もんがく、すべてふかく人にて候。御心やすかるべしと申されけれ共、かまくら殿、見るところありてぞこひうけ給ふらん。むほんおこさばさだめてかたうでせんひじりなり。たゞしよりともが一つのあひだはいかでかかたぶくべき。こどものすゑはしらぬとの給ひけるぞおそろしき。

おはら御かう―寛一本
は灌頂巻に述べる。

(おはら御かう)

ぶんち二年のはるのころ、ほうわうは、女あんの大はらのかんきよの御すまひ御らんぜまほしくおぼしめされけれ共、きさらぎやよひのほどはよかんもなをいまだはげしく、みねのしらゆききえやらで、たにのこほりもうちとけず。かくてはるすぎなつにもなりぬ。かものまつりのころにぞおぼしめしたゝせ給ひける。八ようの御くるまにめし、しのびの御かうなりけれ共、くはざんのあんな、とく大じ、つちみかどいげ、くぎやう六人、てん上人八人まいられけり。大はらどをりひよしの御かうと御ひろうありて、きよはらのふかやぶがつくりしふだらくじ、をのゝたかむら大^皇ごうのきうせきえいらんありて、それより御くるまをとめて、御こしにぞめされける。とを山にかゝるしらくもは、ちりにし花のかたみなり。あをばに見ゆる木ずゑには、はるのなごりぞおしまるゝ。はじめたる御かうなれば、御らんじなれたるかたもなし。いはまをつたふみづのをともしづけて、ゆききの人もあとたえたり。じやくくはうあんなはふるふつくりなせるせんずいの、木たちよしあるさまのみだうなり。いらかやぶれてはきりふだんのかうをたき、とぼそおちては月ぢやうぢうのとしびをかゝぐとも、かやうのところをや申べき。きしのやなぎつゆをふくみ、たまをつらぬくかとうたがひ、いけのうきぐさなみにたゞよふて、にしきをさらすかとあやまたる。まつにかゝれるふちなみの、木ずゑの花ののこれるも、山ほとゝぎすの一こゑも、けふのみゆきをまちがほなり。み山がくれのならひなれば、あ

をばにまじるをそぎくら、はつはなよりもめづらしく、みづのおもにちりしきて、よせくるな
みもしろたへなり。ほうわうこれをゑいらんあつて、かくぞおぼしめしつゞけらる。

いけ水にみぎはのさくらちりしきてなみのはなこそさかりなりけれ

にはのあをくさつゆおもく、まがきにたおれかゝりつゝ、そどものをだに水こえて、しぎたつ
ひまもなかりけり。女いんの御あんじつを御らんずれば、かきにはつたはひかゝり、しのぶま
じりのわすれぐさ、へうたんしばくむなしく、くさがんゑんがちまたにしげしとおぼえ、に
はにはよもぎをひしげり、れいちうふかくとぎして、あめげんけんがとぼそをうるほす共いつ
つべし。いたのふきまもまばらにて、しぐれもしもゝをくつゆも、もる月かけにあらそひて、
たまるべしとも見えざりけり。うしろは山、まへはのべ、いさゝをざゝに風さはぎ、世にたゝ
ぬ身のならひとて、うきふししげきたけのはしら、みやこのかたのことづては、まどをにいへ
るませがきや、わづかにこととふ物とては、みねにこつたふさるのこゑ、しづがつまぎのをの
ゝをと、これらならではさらになし。まさきのかづら、あをつゞら、くる人まれなる所なり。
ほうわう御あんじつにいらせ給ひて、人やあるくゝとめされけれ共、御いらえ申人もなし。や
ゝありておくのかたより、おひたるにこう一人まいり候とぞ申ける。女あんはいづちへぎやう
けいなるぞと仰ければ、此うしろの山にはなつみにいらせ給ひて候と申せば、いかにはなつみ
てまいらすべきものもつきたてまつらぬにや、さこそよをのがれ給ふとも、いまさらならひな
き御わざはいたはしくこそとおほせければ、にこうなみだををさへて、事あたらしき申事にて

は候へども、しやかによらいは、申天ぢくのあるじ、じやうばん大わうのたいし、され共かびらじやうをいでゝ、たんどくせんにいり、たかきみねにはつまぎをひろひ、ふかきたにゝは水をむすび、ゆきをはらひ、こほりをくだくのみならず、なんぎやうくぎやうのこうをつみ、つゐにしやうがくをなし給ふ。ぜんぜのしゆくしうをも、ごせのしゆくぐうをもさとらせ給ひて、しやしんのぎやうしゆしましさんには、なにの御はゞかりか候べきとぞ申ける。此にこのけしきを御らんずれば、身にきたる物は、けんぶとも見わけず、あさましげなるさほうなり。此さまにてかやうの事申ふしぎさよ。なんちはいかなる物ぞと御たづねありければ、にこうなみだにむせび、しばしは物も申さず。やゝありてなみだをしのひて、これはせうなごんにう道しんせいがむすめ、あはのないしと申ものにて候。はゝはきいの二ぬのむすめ也。きいの二ぬは、又ほうわうの御めのとなりしかば、さしも御ちかふめしつかはれし御事に御らんじわすれはて給ひて、いまさらゆめかとおどろかせましゝて、ほうわうもぎよいのそでをしほりあへさせ給はず。御しやうじをひらきて御らんずれば、らいかうの三ぞんひがしむきにおはします。中ぞんのみてには、五しきのいとをかけられたり。ふけんのゑさう、ぜんだうくはしやうならびにせんていの御ゑいなんどもましゝけり。御まへのつくゑには、八ぢくのめうもん、九ぢうの御けさをかれたり。そうじてしよきやうのようもんどもしきしにかきて、ところゝにを(さ)かれたり。らんじやのにほひにひきかゑて、かうのけぶりぞ心ばそくたちのぼる。むかし大江のさだもとぼうし、天だいさんのふもと、せいりやうざんにちうしけるとき、ゑい

じたりし、せいかはるかにきこゆこうんのうへ、しやうじゆらいかうすらくしづのまへとかがれたり。かのじやうみやうこじのほうぢやうのしつのうちに、三まん六千のしちをならべ、十ばうのしよぶつをしやうじたてまつりけんも、かくやとぞおぼえたる。すこしひきのけて、女あんの御せいとおぼしくて、

おもひきやみ山のおくにすまゐしてくもみの月をよそに見んとは

一まなるしやうじを、ひらきて御らんすれば、たけの御さほに、あさのぎよい、かみのふすまをかけられたり。さしもほんてうかんどなたへなるたぐひをつくし、れうらきんしう(の)よそをひも、さながらゆめになりにけり。ぐぶのてん上人も、まのあたりに見まいらせし事なれば、いまのやうにおぼえて、みなそでをぬらしける。さるほどにうしろの山のほそみちより、こきすみぞめのころもきたるあま二人、木のねをつたはりおりくだる。さきにたちたるは、しきみつゝじふちの花いたるはながたみをひぢにかけたり。いま一人はつまぎにわらびおりぐしてぞいだきたる。はながたみひぢにかけ給へるは、かたしげなくもねうゐんにてぞまし／＼ける。つま木にわらびおりそへていだきたるは、大みやの大じやう大じんまさみちのまご、う鳥かひの中なごんこれざねのきやうの御むすめ、せんていの御めのと、大な言のすけのつばねなり。一ねんのまどのまへにはせつしゆのくはうみやうをごし、十ねんのしばのとぼそには、しやうじゆのらいかうをこそまちつるに、おもひのほかにほうわうの御かうなりたるくちおしきよ。さこそ世をすつる身となりたるとも、かゝるさまにて見えまいらせん事心うくかなしく

此のありさま一覽一本
悲想の八万劫……の語
がある。以下第一本に
比して簡略である。

て、たゞきえもいらばやとぞおぼしめされける。よひくごとのあかのみづ、むすぶたもともしほるゝに、あかつきおきのそでのうへ、山ちのつゆもしげくして、しほりかねさせ給ひけん。山へもたちかへらせ給はず、御あんじつにもいり給はず、やすらはせ給ふところに、ないしのあままいりて、御はながたみを給りぬ。これほどにうきよをいとひほだいのみちにいらせ給はんうへは、いまはなにのはかりか候べき。はやくげんざんあり、くはんぎよなしまいらせ給へと申せば、げにもとやおぼしめしけん、なくくほうわうの御まへにまいり給ふ。たがひに御なみだにむせばせ給ひて、しばしはおほせいださるゝ事もなし。やゝありてほうわう御なみだををさへ、此ありさまとはゆめくしりまいらせ候はず。たれかこととひまいらせしと仰ければ、女あん、れいぜんの大なごん、七でうしゆりの大夫、此人々のうちかたよりこそ、ときくどひ候へ。そのむかしはあの人々のとぶらはれべしとはつゆもおもひより候はざつし事をとて、御なみだにむせば給へば、ほうわうをはじめまいらせて、ぐぶの人々も御そでしほりあへ給はず。女あんかさねて申させ給ひけるは、人々にもをくれしは、なかくなげきの中よろこびなり。そのゆへは、五しやう三じうのくるしみをのがれ、しやかのゆいていにつらなり、びくのしやうみやうをけがし、三じに六こんをざんげし、人々のごしやうをとぶらひ候へば、しやうをかへてこそ六だうを見るなるに、これはいきながら六だうを見てさぶらふと申させ給へば、ほうわう、これこそ大きに心を候はね。いこくのげんじやう三ざうは、さとりの中六だうを見、ほんてうのにちざうしやう人は、ざわうごんげんのちからにて、六だう

を見たりとうけ給はる。まさしくによ人の御身にて、そくしんに六だうを御らんぜられん事いかゞ候べき。ねうめん、げにことはりのおほせとおぼえ候へども、六だうを見候やうを、あらゝなぞらへ申べし。此身は平しやうこくのむすめにて、ねうごのせんじをくだされ、きさきのくらゐにそなはつて、わうじをうみたまつり、くらゐにつけ給ひしが、てんしをこにもちたてまつるうへは、おほうち山のはるの花、いろゝのころもがへ、ぶつみやうのとしのくれ、せつろくいげの大じんくぎやうにしやうせられしありさまは、四ぜん六よくのくものうへ、八まんのしよてんにいねうせられてんも、かくやとこそおぼえ候ひしか。さてもさんぬるじゆゑいのあきのはじめ、木そとかやいふものに、みやこをせめいだされ、はるゝのなみのうへにたゞよひて、むろ山水しまとかやのいくさにかちて、人々すこしいろをなをしてありしに、又一のたにとかやのいくさにまけて、一もんす十人しかるべきさぶらひ三百よ人ほろびしかば、ひごろのひたゝれそくたいも、いまはなにならず、くらがねをのべて身にまとひ、もろゝのけだものゝかはをあしてにまき、おめきさげびしこゑのたえざるは、たいしやくごわうのしゆみのはんてんにして、たがひにみせいをあらそふらん、しゆらのとうじやうも、かくやとこそおぼえ候ひしか。さんやひろしといへども、やすまんとするにどころなし。みつぎものもたえしかば、たびのつとめにをよばず。くごはたまゝそな（へ）けれども、水をもたてまつらず。大かいにうかぶといへども、それうしほなれば、のむにもをよばず。しゆりうかいのまんとすれば、まうくはとなりながきだうも、かくやとぞおぼえたる。さてとし月ををくる

ほどに、すぎにしはるのくれに、せんていをはじめたてまつり、一もんともにもじあかまのなみのそこにしづみしかば、のこりとまゐる人どものおめきさけぶこゑ、けうくはん大けうくはんのちごくのそこにおちたらんも、これにすぎじとぞきこえし。さても又ふしどもにとらはれてのぼり候ひしとき、はりまの國あかしのうらとかやにつきたりし夜、ゆめまぼろしともわかつたず、なぎさにいでにしを、さしあゆみゆけば、きんぐ七ぼうをちりばめて、るりをのべたるみやのうちへまいりたり。せんていをはじめまいらせ、一もんの人々どもなみゐて、どうをんにだいばほんをどくじゆしたてまつるあひだ、これはいづくぞと申しかば、二ゐのあま、これはりうぐうじやうとこたへ申せしほどに、あなめでたや、これほどゆゝしきどころにくるしみは候はじと申せば、二ゐのあま、此やうは、りうちくきやうに見えて候ぞ。それをよく見給ひて、ごせとぶらひ給へと申とおもひて、ゆめはさめ候ひぬ。これをもつてこそ六だうを見たりと申候へ。わがみはいのちおしからねば、あさゆふこれをなげく事もなし。いかならんよにも、わすれがたきはあんとく天わうの御おもかげ、しんのおはりみだれぬさきにとかなしめば、たゞりんじうの正ねんばかりなりと申させ給ひもあへず、又なみだにむせばせ候へば、ほうわうをはじめまいらせて、ぐぶの人々、くぎやうてん上人、御たもとしぼりもあへ給はず。なをもなごりはおしけれ共、さてあるべき事ならねば、ほうわうみやこへくはんぎよなる。せきやうにしにかたぶけは、じやくくほうみんのかねのこゑ、けふもくれぬとうちしめる。女あんなはほうわうのくはんぎよを御らんじをくりまいらせさせ給ひて、御なみだにむせばせ給ひ

て、たゞせ給ひたるところに、おりふしほとゞぎすのをとづれてすぎければ、ねうゐん、

いざさらばなみだくらべんほとゞぎすわれもうき世にねをのみぞなく

とく大じのさ大じんさねさだ、御あんじつのはしらにかきつけるとかや。

いにしへは月にたとへしきみなれどそのひかりなきみ山べのさと

そのゝちほうわうもつねに御とぶらひ共ありけり。ねうゐんつゐにけんきうのころ、りうによが正がくのとををひ、わうじやうのそくはひをとげ給ふ。れいぜいの大なごんたかふさのきやう、七でうしゆりの大夫のふたかのきやうのきたのかたぞ、さいごまでも御とぶらひは申されけるとかや。

(だんぜつ平家)

さるほどに六だい御ぜんは、十四五にもなり給へば、見めかたちいくたくひなく見え給へり。十六と申、ぶんち五年三月に、ひじりにいとまこひ給ひて、いつくしげなる御かみ、かたのまはりよりはさみおろし、かきのころもなんどをこしらへていでられけり。さいとう五さいとう六、おなじやうにいでたちて、御ともしけり。まづかうやへのぼりて、たちぐちにう道があんじつをたづねておはしつゝ、これもりがこにて候。ちくのゆくゑきかまほしさに、これまでたづねてのぼり候との給へば、たきぐちにうだう、いそぎいであひ見たてまつれば、すこしもちがはせ給はず。たゞいまのやうにこそおぼえ候へとて、すみぞめのそでをぞしほりけ

る。やがてぐしたてまつり、くまのへまいり、みつの御山へさんけいし、そのゝちはまのみやの御まへのなぎさにたちて、あともなき、^{くイ}しるしもなかりき、はるかのかいじやうをまばらへて、わがちゝは此おきにこそしづみ給ひぬとて、おきよりたちくるなみにとはまほしくぞの給ひける。それよりみやこへかへりのぼり、たかをに三ゐのせんじとて、おこなひすましておはしける。平家のしそんといふ事は、さんぬるげんりやく二年のふゆのころ、一ツ二つのこをきらはず、はらの中をあけて見んといふばかりにたづねいだしてうしなひてんげり。いまは一人もなしとこそおもひしに、しん中なごんどもゝりのすゑのこ、いがの太夫ともたゞといふ人おはしけり。三ざいと申けるとき、みやこにすてをきおちくだりたりけるを、めのとのきいの二郎ひやうゑにうだうためなりといふものがやしなひたてまつり、いがの國にある山でらにをきたてまつりたりけるほどに、十四五になり給へば、ちとうしゆごあやしみけるあひだ。かくてはかなはじとて、けんきう七年三月にぐしたてまつりみやこへのぼる。ほつしやうじのひとつばしなるところにをきたてまつる。そのころみやこのしゆごはかまくらのう大しやうよりどものきやうのいもうとむこ、一でうの二ゐにう道よしやすのまゝなり。いにしへは大みやの二ゐとて、よにもおはさゞりしが、いまはくはんとどうのたよりとて、人のおちをそるゝ事かぎりなし。そのさぶらひに、ごとうさへももときよといふもの、いかゞはしたりけん、此事をきゝて、そのせい三百よきにて、けんきう七年十月七日のうのこくに、ほつしやうじのひとつばしへぞをしよせたる。ざい京のぶし共これをきゝ、をどらじとはせけるほどに、す千きにをよべ

る。くだんの所は、四はうに大たけうえまはし、ほりをふたえにほり、さかも木ひきて、はしをひきたり。平家のさぶらひにきこふるゑつ中の二郎びやう衛もりつぐ、かづさの五郎びやう衛たゞみつ、あく七びやうへかげきよ、これ三人だんのうらのかつせんよりうちもらされ、さるりにまじはり、源氏をうかゞひまはりけるが、いにしへのよしみをたづねて、此人にぞつきたりける。これをはじめて、じやうのうちにくきやうのもの共廿よ人たてこもりて、いのちもおしまずたゝかふところに、おもてをむくるものなし。され共よせてのものどもほりをうづめてせめいりゝたゝかひけり。じやうのうちにもやたねみないつくして、たちにひをかけじがいてんげり。かづさの五郎びやう衛たゞみつは、そのときそこにてうちじにしつ。ゑつ中の次郎びやうへとあく七びやうへは、いかゞはしたりけん、此ときも又おちにけり。いがの太夫ともたゞは、しやうねん十六になり給ふが、はらかききり、にしにむきて、十ねんとなへてはて給ひぬ。めのときいの次郎びやうへにう道はやうくんのじがいし給ひたるを、ひぎにひきかけ、わかぎみも、はらかきゝりかさなつてぞふしにける。そのこきいのしんひやうへ、同次郎、同三郎ともにうちじにしてんげり。うたるゝもの十六人、じがいするもの五人とぞきこえし。ごとうさへもん、此くびどもとりあつめて、二めにう道どのへはせまいる。二めにう道くるまにのり、一でうおほちへやりいださせ、じつけんせられけり。きいの次郎びやう衛にう道がくびをば見しりたるもの共おほかりけり。いがの太夫のくびをば、人いかでかするべきなれば、見しりたるものなし。しん中なごんのきたのかた、ちぶきやうのつばねとて、七でうのね

うみんに候はれけるを、むかひよせたてまつり、見せまいらせければ、ちぶきやうのつぼね、いさとよ、三ざいと申とき、こ中なごん、みやこにすてをきておちくだられてのちは、いきたりとも、しゝたりとも、われそのゆくゑをきかず、たゞしこ中なごんのおもひいだすところのあるは、もしさやあらんとて、なみだにむせび給ひけるにぞ、ともたゞのくびにもさだめける。こまつ殿のすゑのこ、たんごのしゝうたゞふさは、やしまのいくさよりかけはなれて、きの國のちう人、ゆあさの七郎びやう衛むねみつがもとにぞおはしける。いかゞはしたりけん、此事くはんとくにきこえて、くまのゝべつたうたんぞうにおほせて、ゆあさをせめらる。たんぞうゆあさがもとへよせて、をつかへさるゝ事すかど、され共いまだせめおとさず、たんごのじゝうの給ひけるは、さればとて、たゞふさがゆへに、をのゝの身をむなしくなしたてまつらん事こそいたはしけれ。たゞわれをみやこへぐしてのばれ。かう人になりて、きられんとの給へば、いかでかさる事候べしとて、しきりにかなふまじきよし申けれども、あまりにの給ふあひだ、ちからをよばず。七郎びやうへぐしたてまつり、六はらへぞいでたりける。此よししくはんとへ申ければ、べちのしさいあるまじ。いそぎきるべしとの給へば、六でうかはらにてつゐにきりたてまつる。さてこそゆあさはあんどしけれ。又こまつどのゝ御こに、とさのかみむねざねといふ人おはしけり。これは二さいのとき、おほあのみかどのさ大じんつねむねとりはなちて、廿よねんやういくせられき。されば平家みやこをちしときも、あひぐせざりき。いかゞはしたりけん、此事くはんとへきこえて、くはんとより、せむべきにてくだせ

なんどきこえしあひだ、とさのかみ、いそぎしゆつけし給ひて、とう大じのしゆんじうしやう人のもとへおはして、これはこまつのだいふがこにて候が、三ざいのときより、おほいのみかど左府のさふとりはなちてイ、此廿よねんやういくせられき。さればゆみやのもとうらをしり候はねども、なを平家のゆかりとて、くはんとうよりせむべきなんどきこえ候あひだ、もとゞりきりて、ひじりの御ばうたのみまいらせんとてまいりて候。たすけさせ給へとの給へば、しやう人、かなふべしとはおぼえ候はね共、申てこそ見候はめ。そのほどはこれにしのばせ給へとて、とう大じのあぶらぐらといふところをきたてまつる。しやう人くはんとうへ申されければ、かまくら殿、たいめんをしてこそ。きるべき人ならばきり、たすくべき人ならばたすけんずれ。いそぎまつこれへくださるべしとの給へば、しやう人ちからをよばねば、とさはにう道くはんとうへくだし給ひけり。とさにう道くはんとうへくだるべしときこえし日より水をだにものどにいれ給はず、十六日と申に、あしがら山にてつめにひじにし給ふ。とし廿三、心のうちこそおそろしけれ。けんきう八年十一月七日、たちまの國のちう人、ひきのごんのかみ、ゑつ中の次郎びやう衛がくびもちてかまくらへまいりたり。これとしごろもりつぐともしらずして、ごんのかみをたのみてつかはれけるほどに、しつけこつがら、たちあふるまひ、ことにふればつぐんに見えけるあひだ、あはれこれは下らうとはおぼえぬもの哉とおもひ、これをあやしめたづねきくほどに、もりつぐにてありけるなれば、うちたりけるとかや。あく七びやう衛も、おなじきとしのふゆ、かまくらにてとらはれてうつのみやにあづけらる。

そのころのしゆしやうと申は、ごとばのみんなの御事なり。御あそびをのみ御心にいれさせ給ひて、天がは一かうきやうの二ほんのまゝなりければ、世のうれひなげきもたえざりけり。たかをのもんがく、これを見たてまつり、よのあやうき事をかなしみて、二のみやは御がくもんもおこたり給はず、じやうりをさきとせさせ給へば、いかゞしてか二のみやをくらゐにつけたてまつらんとはかりける。されどもかまぐらのう大しやうおはしませしほどは、申もいさす。しゆしやう御くらゐをさらせ給ひて、たい一のわうじにゆづりたてまつり給ひけり。正治ぐはん年正月十三日に、かまぐら殿五十三と申にうせ給ひてのち、もんがく此事とりくはだてけるほどに、たちまちにきこえて、もんがくめしいだされ、とし八十にあまりて、おきの國へぞながされける。しやうくはうあまりにてまりをこのませましゝければ、もんがく、をつたてのちやうし、りやうそうしにぐせられて、みやこをいでしときも、さまぐのあくこうども申てくだりけり。ぎちやうくはんじやにをひては、わがながさるゝところへむかへ申さんずる物といひてぞながされける。おきの國へくだりつきて、つゐにおもひじにゝぞしにける。そのありさま、おそろしななんどもおろかなり。しかるにしうきう三年のなつのころ、一ゐんうきやうのごんの太夫よし時をうたんとし給ひしほどに、いくさにまけ給ひて、ところこそおほけれ、おきの國へしもうつされ給ひけるぞあさましき。

六だい御ぜんは三ゐのぜんじとて、おこなひすましておはせしを、もんがくながされてのち、さる人のでし、さる人のこなり、まごなり。かみはそりたりとも心はよもそらじとて、みや人

すけかねに仰て、かまくらへめしくださる。此たびはするがの國のちう人、おかべの三郎大夫
うけ給はつて、かまくらの六うらがさかにてきられけり。十二さいより卅二までたちける
は、はせのくはんをんの御りしやうどこそおぼえたれ。それよりしてぞ、平家のしそんはたえ
にける。

百二十句本平家物語 解説

一

拙著、「平家物語諸本の研究」（昭和十八年八月刊）以後、百二十句本平家物語に対する関心も高くなり、八坂流諸本の調査も微に入った観がある。渥美かをる博士の「平家物語の基礎的研究」（昭和三十七年三月刊）、古典文庫、平家物語、百二十句本（昭和四十三年十月、四）の山下宏明氏の解説（平家物語百二十句本再考）、百二十句本平家物語（斯道文庫蔵本）影印本の別冊、解題（松本隆信氏）などがあり、筆者もこの百二十句本に就いての関連研究として、仏教大学人文学論集の第二号（昭和四十三年九月刊）に、「再び屋代本平家物語について」、同第三号（昭和四十四年九月刊）に、「平家物語、鍋島本と平戸本」と題して詳細な調査を発表したのである。これらの一連の研究に於ても、その意見は必ずしも一致するものではない。

筆者の見解は、平家物語の諸本を一方流、八坂流本と増補せられた諸本（長門本、盛衰記、延慶本等）に三大別し、八坂流諸本を更に甲、乙、丙、丁類に細分して、この百二十句本をその甲類本、八坂流本の中では、初期成立の伝本として位置づけをしたのである。そして同類本として、鎌倉本（新考館文庫蔵）、佐々木信綱博士旧蔵本（天理大学蔵）、平松家真字本（京都大学蔵、卷十二欠）、屋代本（国学院大学蔵、卷四、卷九欠）をあげたのであるが、その後、鍋島文庫本（佐賀大学蔵）と平戸本（斯道文庫蔵）が出現して、百二十句本の性格が更に明確に認められるに至った

のである。

二

百二十句本の伝本としては、古く国会図書館蔵の九冊本と京都府立総合資料館蔵本が知られて居たが、筆者の研究に、大島雅太郎氏旧蔵本（天理大学蔵）、安田文庫蔵本が加はり、戦後に、鍋島家蔵本（天理大学蔵）と国会図書館蔵本（古典文庫影印）が出現して、平仮名本にも数部が存在することになった。ここに翻印した京都総合資料館本は、大島雅太郎氏旧蔵本と極めて類似し、大島本の転写と認めても差支がなからう。大島本は室町末期の写と認められ、資料館本は江戸初期の写と認められよう。楮紙袋綴、一面十行である。これに対して斯道文庫蔵の平戸家本は漢字交りの本で特色がある。これらの諸伝本の相互関係を如何に観るかに就いても、山下宏明氏、松本隆信氏も筆者とは同一でない。これは根本に於て、平家物語諸本の全般からの系統論と深く関係してゐて、これら諸本のみによつて解決することが容易でないからである。多くの従来の研究者は、山田孝雄博士の説をうけて、灌頂巻の存在しない八坂流本を古態として、八坂流の屋代本を最も古き伝本と認め、一方流の諸本の成立を後としたので、一方流の古本、覚一本との関係において本文批判が十分出来なかつたのであるが、更に百二十句本と屋代本との関係に於ても、屋代本をより古態とする見解を脱し得ないのが現状である。山下宏明氏の「平家物語百二十句本再考」も又然りである。これは従来平家物語の本文現象に、後出の本文は必ず増補されるものであるといふ鉄則を以て観たからで、筆者の述べた如く、簡素化、省略化の現象の存在すること添加する時には、簡略なる本文が必ずしも古態でないことが認められるのである。例へば巻五、物怪の章に、屋代本に、

節刀ヲハ今ハ伊豆国流人前右兵衛佐源頼朝ニタハラスル也ト被仰ト夢ニ見テ人ニ語程ニ、太政入道是ヲ聞付給テ、撰津判官盛澄ヲ以テ、不思議ノ夢ミタンナル青侍カ御辺ノ許ニ候ナル、急キ是ヘ遣シ給ヘト有ケレハ。

とあつて、春日大明神に節刀を賜はる語がないが、これは明らかに省略であつて、他の同類本は、一方流本と同じく、百二十句本には、

せつたうをよりともにたぶとおほせられつるは、八まん大ぼさつ、そのうち、わがそんなにもとおほせられしは、
かすが大みやう神、かう申はたけうち大明神とこたへらる、このゆめを人にかたるほどに、入道きゝつけ給ひ
て、つのはうぐはんもりずみをもつて、まさよりのきやうのもとへ、ゆめみのあをさぶらひいそぎこれへとあり
ければ。

とある。唯百二十句本は一方流本（覚一本）の、源大夫判官季貞が撰津判官盛澄となつてゐるのが異なる。若し屋代本が古態ならば覚一本も撰津判官盛澄とあつて然るべきである。盛衰記は蔵人左少弁行隆とし、長門本は越中次郎兵衛盛次、延慶本は蔵人左少弁行隆である。同類本である佐々木信綱旧蔵本や平松家本は源大夫判官季貞である。これは覚一本を古態とする筆者の見解にたてば、百二十句本や屋代本になつて盛澄となつたと考ふべきある。勿論この様な僅かな人名や語句では前後を決定する有力な資料ではないが。

この省略、簡素化の原因は平曲の流伝と無関係ではなく、これこそ平曲による平家物語の本文の重要な変化流動である。

次に卷々の編成がある。これは筆者が幾度も述べる所であるが、八坂流甲類本と乙類本、覚一本との記事の順序の相違変化がある。

覺一本

百二十句本(甲類)

屋代本(甲類)

中院本(乙類)

卷二

阿古屋松

同上

同上

同上

三人被流

同上

同上

同上

大納言死去

同上

卷三

德大寺殿島詣

朝覬行幸

山門滅亡

山門滅亡

善光寺炎上

善光寺炎上

熊野崇敬

同上

同上

熊野崇敬

康賴祝詞

竜女出現

同上

康賴祝詞

竜女出現

康賴祝詞

同上

竜女出現

卒都婆流

同上

同上

卒都婆流

蘇武

同上

同上

蘇武

卷三

朝覬行幸

德大寺殿嶋詣

(卷二)

大納言死去

同上

中宮御産

中宮御産

卷三

朝鯢行幸

同上

山門滅亡

同上

中宮御産

同上

この相違は極めて重要である。山門滅亡は治承二年二月以後で年時から云へば卷三に来るべきものである。然るにこの点に留意する論考を見ないのは筆者の遺憾とする所である。この甲類乙類への流動、即ち覚一本の編成より、甲類（百二十句本）、乙類（中院本）の移動推移を認めれば平家物語の八坂流本の本文批判は極めて容易に説明が出来るのである。従つて百二十句本と同類本との比較においても、卷によりて、同類本の覚一本に近い詞章を有する場合は、それが百二十句本よりは古態であると推定せられるので、平松家本は百二十句本以前の成立と認むべき所がある。例へば卷十、重衡戒文の条を示せば、平松家本では、

聖人涙ニ咽テ須臾ハ物モ不宣、良有テ実難稟々人身ヲ、空ク三塗ニ還給ム事、悲テモ尚余有、然ヨ今善心発シ坐
ン事、又三世諸仏モ定テ随喜仕給ヘシ、就テ夫出離ノ道理、雖モ為リト区、末法濁乱ノ機ニハ以テ称名ヲ為タリ
トス勝レ、志ヲ九品ニ分テ、行ヲ字々ニ縮テ、如何ナル愚癡闇鈍者モ唱ルニ便有、罪深ケレハトテ卑下為給ヘカ
ラス、十惡五逆モ恵心為ヌニハ往生ヲ遂ク、功德少ナケレハトテ、不可望絶ス、一念十念モ心至ヌレハ来迎ス、
専称名号ヲ至ルト西方ニ、尺シテ専ラ名号ヲ称スレハ至西方ニ、念々称名常懺悔ト演ヘテ、念々御名ヲ唱レハ懺
悔スルナリト教タリ、利見即是弥陀云名号ヲ憑マハ、魔縁親近ズ、一声称念罪皆除ト念スレハ、罪皆除ケリト見
ヘタリ、淨土宗ノ至極各略ヲ存テ、大略是ヲ肝心トス、但往生ノ得否ハ信心ノ有無ニ可シ依、只深く信シテ努々
疑ヒ不可生、若此教ヲ深く信シテ行住坐臥時所緒縁ヲ不嫌、三業四儀ニオイテ、心念口称ヲ忘給ハ、畢命ヲ期ト

シテ、此苦界ヲ出テ、彼不退ノ上ニ往生シ給ム事、何ニノ疑カ有ランヤト教化為給ヘハ、中将不斜喜ヒ、此次ニ戒ヲ持タハヤト存候……。

とあつて、殆ど覺一本と同文である。然るに百二十句本には、

しやう人なくくいたゞきばかりそり、かいをぞさづけ給ひける、その夜はしやう人とゞまりましゝて、夜もすがらじやうどのしやうごんをくはんずべきさまぐのほうもん共をぞの給ひける。

とあつて、法然上人の戒文がないのである。屋代本も同じく、

聖人泣々頂斗剃テ戒文ヲソ授給ケル、其夜ハ上人留給テ、終夜淨土莊嚴可觀様々ノ法文共ヲソ宣ケル

とある。この簡略化と共に一方では増補せられたものも又多い。これらに就いては、前記の仏教大学文学論集の論文に詳しく述べたのでここに再説しない。

三

次に百二十句本平家物語はいかなる価値を有するかといへば、全巻百二十句に分割した点が注目せられるが、他の伝本とは関係が見出せないので章段の分割上の影響は他に与へてゐない。その本文が仮名であるために読み方がやや正確に把握せられると共に、覺一本など一方流本の不備や誤脱を補ふことが出来る点が重要であり、増補した詞章（勳善など）によつて、後の著作に影響を与へ、且つ八坂流乙類諸本の基となつたといふ点である。この見解を基として、他の論文などを少し批判して見たい。第一に山下宏明氏の論を見ると、古典文庫二五五、百二十句本平家物語四の付録の「平家物語百二十句本再考」に、百二十句本を、甲・乙・丙類の三に分類されたが、その成立の

前後關係を、甲・乙・丙類の順と認めたものである。甲類本として、斯道文庫本（筆者、平戸本）、乙類本は小城本（筆者、鍋島本）、丙類本は平仮名の諸伝本である。これらの諸本を屋代本、平松本、佐々木本、鎌倉本等と同類本とすることは筆者と同意見である。そしてこれらの甲乙丙類の諸本は近い關係にあることも又同じ意見であるが、この甲乙丙類本には共通の祖本があると述べてゐる。（これは一応は正しいが、具体的なものとして推論するには未だ十分でない所がある）、これらの諸本の異同を考察する時に、覚一本との關係が定らない所に不備がある。山下氏は、平松本、屋代本、佐々木本、鎌倉本の群と甲乙丙類の群とを比較して、短い語句の差をあげて居られるが、これはあまり重要でない。そして、甲乙丙類の諸本が屋代本と重なる面が多い故に、屋代本を最古態とし、

屋代本——甲、乙、丙類

——佐々木本、覚一本、鎌倉本

と推定されてゐる。しかし、屋代本が最古態でないとすれば、この論は全く成立しない。筆者は屋代本は、百二十句本成立以後のものであると認められるので、これを首肯するわけにはゆかない。

次に甲乙丙類の諸本の前後關係を、甲類本の斯道文庫本を最古態とする。例へばとして、卷十二の重衛被斬をあけてゐる。筆者がこれを更に覚一本を加へてみるならば、

○覚一本（卷十二、巻頭）

かの後世菩提をとぶらはれけるこそ哀なれ。平家みなほろびはてて、西国もしづまりぬ。国は国司にしたがひ、庄は領家のままなり。上下安堵しておぼえし程に、同じき七月九日の午尅ばかりに大地おびたゞしくうごいて良久し。

○屋代本は、

三位中将ノ後世ヲソ訪給ケル、平家亡テ後ハ、西国モ静リス、国ハ国司ニ随庄ハ領家ノマヽ也、上下安堵シテ思程ニ、同七月九日ノ午尅斗ニ大地震シク動イテ良久シ。

とある。これに對し、甲類（斯道文庫本）は、

三位中将ノ後世ヲソ訪ヒ玉ヒケル平家亡テ。

とあつて、以下を缺き、頁を改めて、

七月九日ノ午尅ハカリニ大地震動ヒテ稍久シ。

と續いてゐる。この缺文は切り捨てたのであらうと述べたのは同感であるが、次に、乙、丙類では、

三位中将ノ後世ヲソ吊ヒ玉ヒケル、同七月九日午尅計ニ……。

とあるによつて、斯道本の段階から、乙丙類の本文が生み出されつつあつたと推論されたが、これはやや速断であらう。斯道本の「平家亡テ」は覚一本などには文があつて、これを補はんとして書き始めて途中で中止した場合も考へられるからである。

次に土佐守宗実最後（卷十二）の条に、

○覚一本、

此人奈良を立ち給ひし日よりして飲食の名字をたて、湯水をものどへいれず、足柄こえて関本と云所にしてつゝにうせ給ひぬ。いかにも叶まじき道なればとておもひきられけるこそおそろしけれ。

○屋代本、

土佐入道関東へ下候ヘシト聞ヘシヨリ、水ヲタニ喉ニモ入給ハス、十六ト申ニ、足柄山ニテ遂ニ千死ニ死給ケリ、年廿三、心ノ中コソ怖シケレトソ人申ケル、是ハ、建久八年十月ノ事也、同十一月七日但馬国ノ住人氣比權守越中次郎兵衛が頭持テ鎌倉ヘ参リタリ、是ハ年来盛次トモ不知シテ、權守ヲ憑テ被仕ケル程ニ、立居振舞ノ触事ニ群ニ拔テ見ケル間、權守アツハレ是ハ下臈トハ云ヘ共下臈トハ不覺物ヲト思テ、アヤシメ、尋聞ク程ニ盛次ト聞テ討テ進シタリケルトカヤ、惡七兵衛モ同年ノ冬鎌倉ニテ捕レテ宇都宮ニ預ラル、其比、主上ト申ハ後鳥羽院ノ御事也……。

とあるが、越中次郎兵衛盛嗣と惡七兵衛の事は覺一本になく、これは増補と認むべきもので、屋代本を最古態とすれば、この記事を有しない覺一本はこれを省略したと認むべきであらうが、八坂流の乙類本（筆者云）にはこれが存し、又、乙丙類本（山下氏云）には、屋代本に類するが、

年廿三心ノ中コソ怖シケレ、建久八年十一月七日、但馬国ノ住人、比企權守越中次郎兵衛カ首村テ鎌倉ヘ参タリ……

とあり、甲類本（斯道文庫本）も、略同文である。これに対して山下氏は、屋代本の類を見ながら、途中で筆を折って省略した痕跡が見られると云ふが、それ程の相違があるわけではない。屋代本と百二十句本との類似点は極めて多く、又相違点も多いので、もっと顕著な相違点を引用すべきである。その他記事の順序の相違に就いては、卷五、福原院宣から富士川にかけての構成をあげるが、筆者の観点からいへば、

覺一本

屋代本

資料館本（丙類）

鍋島本（乙類）

平戸本（甲類）

福原院宣

同上

同上

同上

同上

平家発向	同上	同上	同上	同上
(嚴島御幸願文)				
維盛客儀	同上	同上	同上	同上
忠度女房	同上	同上	同上	同上
節 刀	同上	同上	同上	同一
三の存知	同上	同上	同上	同上
嚴島願文	同上	同上	同上	同上
清見関着	同上	同上	同上	同上
忠清意見	実盛述懐	同上	同上	同上
文男沙汰	ナシ	同上	同上	同上
実盛述懐	忠清意見	同上	同上	同上

となつてゐて、屋代本は清見関到着以後、佐竹太郎の雑色の文を奪つて源氏の勢の数を尋ねる条が存しない。これ
 に関しては何も述べて居ない。平戸本が、巻末に重複して一部を書き、經正竹生嶋詣と嚴島御願文を加へて居るの
 は誤写に基づき書き改めたものであつて、書写の時に構成を改めようとしたものではあるまい。問題は嚴島御願文
 の位置が、三つの存知の次にあるのが適當と認むべきで、經正の竹生嶋詣を清見関到着の次に述べるのは全くの誤
 りである。とすれば、平戸本は決して資料館本以前の成立とは速断出来ない。

百二十句本と鍋島本とを比較するに、巻によれば鍋島本は覚一本に近似する所がやや多いので、百二十句本成立以前と認むべきであると仏教大学文学論集第三号に述べたので再説しない。

次に松本隆信氏の解説を見るに、斯道文庫本が現存百二十句中、最も古い書写にかゝる本であるといふが、書体上より見るもその如く感じない。この本が漢字交り本であることは、松本氏の説く如く、平仮名本の祖本が漢字交り本であつたといふ意味において注目したい。次に松本氏が斯道文庫本と、鍋島本、大島雅太郎氏旧蔵本、国会図書館本と三本の目録、詞章の相違を示されたのは有益である。但しこれらの諸本の相違は僅少である。斯道文庫本を中心としての屋代本、平松家本等の諸本との比較は複雑であつて、表によつて説明されると明白になるであらうと思はれる。結論として、斯道文庫本は、屋代本は勿論平松家本よりも遅れるとすべきであらうが、内容的には編集本としての性質上、この本にもまた古い形と新しい形とが混在してゐる姿が見られると述べ、どれが古態で、どれが新態ということは決めるのは難しい場合が多いと結び、屋代本平松本との関係から、屋代本の欠巻（巻四、巻九）を補ふべきものとして注目されて居る。後半には斯道文庫本と鍋島本、大島本、国会本との異同を列挙して居る。筆者から見れば、鍋島本を最古に、大島本、国会本を次に、斯道文庫本を最後にすべきではないかと推定する。

四

最後に覚一本と甚しき相違のある箇所を示して比較研究の基としたい。

○巻一

鱸の事は百二十句本には存し、他の同類本（八坂流甲類本）には無い。覚一本と同一である。二代後の条に則天武后の事がある。覚一本にはなく、同類本にはすべて存する。額打論の条に、澄憲の哀傷の歌（他本は巻六高倉院崩御に載る）があり、百二十句本は重複する。事實は澄憲の歌は二条院の崩御の時の歌である。

○巻二

記事の順序の覚一本と相違のあることは前述の如くであるが、特に文章の甚しく異なるのは少将乞請、烽火沙汰、新大納言被流、阿古屋松、大納言死去、徳大寺沙汰、蘇武の章である。この巻の相違は特に甚しいと言へよう。

○巻三

無文、燈籠の二章のうち、百二十句本は無紋の章のみが有つて、覚一本に類するが、他の同類本は無紋、燈籠の二章を缺いてゐる。

○巻四

嚴島御幸の章に、備中内侍の事がありて覚一本に類するが、他の同類本にはなく、流布本にも存しない。又還御の章も覚一本に類して詳細であるが、他の同類本はすべて簡略である。例へば、平松家真字本を示せば、

同廿六日嚴島へ御参着、入道相国ノ最愛ノ内侍カ宿所御所ニ成、中二日御逗留有テ、經念舞樂行ワル、御導師ニハ三井寺ノ公憲僧正ヲ召具セラレタリ、聲打鳴シ啓白ノ言ニ、九重ニ多ノ神達ヲ闕テ、八重塩路ヲ御幸ヲハ何土カ御納受無ルヘキト高ラカニ申ケレハ、君モ臣モ感涙ヲ流サセ御在ス、神主佐伯景公、座主尊榮法眼ニ為サル、神慮モ動キ、太政入道ノ心モ揺ク覽トソ見ヘシ、同四月五日上皇還御ノ次ニ、入道福原ノ別業へ入セ給フ、入道ノ孫越前少将資盛、従四位上トソ聞ヘシ、同ク入道養子丹波守清邦正五位下ニ叙ス、同八日都へ入セ給フ、御迎

ノ公卿殿上人鳥羽ヘソ被參ケル、還御ノ時ハ鳥羽殿ヘハ御幸モ成ズ、入道相国ノ西八条ノ亭ヘ入セ給フ、同四月廿二日新帝御即位有。

とあり、極めて簡略といふべきである。鶯の章も百二十句本、平松家本は覚一本に同じく頼政の鶯を射たのを二回（近衛院と二条院の時）述べるが、屋代本は、巻一の御輿振の章に二条院の時の鶯を射る事を述べてゐる。従つて巻四にはそれを述べないであらう。

○巻五

都遷の章において、京都のすぐれた事を述べて二首の歌を載せ、次に都遷の先蹤を述べるのが百二十句本及び同類本の順序であるが、覚一本はこれと異つて、先蹤が先に來て、二首の歌が後に述べられる。この巻は覚一本と詞章の差が少ないが、屋代本は省略脱缺が多いのが注目せられる。例へば、月見の章で、優婆塞官の娘の事がなく、前述の如く物怪沙汰に春日大明神の事が無い。次に富士川の章に経正竹生鳴詣がある。これは当然覚一本の如く巻七に入るべきである。

○巻六

慈心坊の章が特に覚一本と異同が甚しい。木曾元服の事と額入道西寂の事が無い。そして覚一本の巻六の巻末が、百二十句本の巻七の巻頭に載ることは既に述べた所であるが、屋代本になると、更に差異が甚しく、入道死去後、怪異な酒宴の事もなく、邦綱死去も相違が多く、百二十句本と同類とは認められない程の相違がある。巻十にあるべき宗論がある。

○巻七

經正竹生嶋詣が卷五に入つてゐることは前述の如くである。木曾願書、俱利迦羅落も覚一本と差甚しく、篠原合戦は極めて簡略であり、実盛、主上都落などが差が多い。記事の順序も覚一本と異り、忠度都落、經正都落、青山沙汰、維盛都落、聖主臨幸、池大納言都留、東国大名、平家落足の順である。

○卷八

山門御幸（四官即位）の条に、紀伊守範光の歌がなく、太宰府落、妹尾最後、室山合戦、鼓判官、法住寺合戦は覚一本と差異が甚しい。屋代本は宇佐行幸の条が、覚一本とも百二十句本とも異なるもので特に注目すべき所がある。

○卷九

生ずきの沙汰（宇治川合戦）、宇治川先陣、河原合戦、桶口被斬、六箇度軍、一二之懸、二度懸、坂落、越中前司最後、重衡生捕、敦盛最後、落足、小宰相身投。いづれの章も覚一本との差異が甚しい。この様な詞章が容易に覚一本の如き本文に推移することは考慮し難いことである。覚一本の如きものがこの様な本文になることは極めて複雑な伝誦によつて成立したと認むべきである。平家物語の本文の批判にはこの様な巻をこそよく比較検討すべきである。

○卷十

首渡、請文、戒文、千手前、横笛、高野巻、維盛出家、維盛入水、三日平氏、すべて覚一本と差異が甚しい。巻九と同様に注目すべき巻である。特に戒文は簡略で、法然の戒言はなく、

みな人のしやうじんのによらいとあふぎたてまつるしやう人にふたゝびげんさんに入候へば、いまはむしのぞいしやうもことくくしうめつし候ひぬとこそぞんち候へ。しゆつけはゆるされねば、ちからをよばず。もとより

つきながらじゆかいさせ給ふべふや候らんと申されければ、しやう人なくゝいたゞきばかりそり、かいをぞさづけ給ひける。その夜はしやう人とゞまりましゝて、夜もすがらじやうどのしやうごんをくはんずべきさまゝくほうもん共をぞの給ひける。

とある。この傾向は維盛入水の条の滝口入道の戒言にも見られ、覚一本の詳細な記述が簡略である。恐らく宗教的な難解な語句をさけたものではあるまいか。又宗論を巻六に入れてゐるのも百二十句本、同類本の特色である。

○巻十一

全巻、すべて覚一本の本文と甚しい差異がある。覚一本の灌頂巻にある記事の中、建礼門院の吉田入御、同御出家がこの巻にある。巻の最後は、副将被斬である。従つて巻十二の巻頭は大臣父子関東下向の事で、覚一本の巻十一の腰越以下が巻十二に入るわけである。又劔巻は増補せられて極めて詳細である。同類本の劔巻は、覚一本に類するもので百二十句本の特質の一つである。屋代本のみは更に別冊として増補された劔巻がある。

○巻十二

腰越、大臣殿父子被斬以下、全巻、覚一本と甚しい差異がある。巻十一と同様である。従来平家物語の研究者が、巻々を比較する時に差異の少い前半を比較検討して推論する者が多かつたのであるが、この巻十二を比較せられたならば、覚一本がいかに統一ある本文であり、百二十句本以下の八坂流甲類本が混乱した本文を有してゐるかが分明するであらう。八坂流甲類本がすべて同一ならば又考慮の余地があるが、八坂流甲類本相互にも出入があつて、もしこれらを覚一本の如きものに統一することは到底出来るものではない。従つて灌頂巻の成立も、後に分出して成立したといふ如き推定は他の本文の比較検討を経たならば首肯することは出来ないであらう。平家物語の研

究者には、本書の卷十一、卷十二全卷を覚一本と比較してから推断すべきであることをお願いしたい。

(四六、一〇、二三)